奥津町埋蔵文化財発掘調査報告　1

土路江遺跡

１９９３年３月

岡山県苫田郡奥津町教育委員会

題字　奥津町長　森元三郎

2 号 住 居 址

はじめに

奥津町は岡山県の最北部中国山地のうち懐にあり、地形は1000メートル内外の連山に囲まれ、全般に急傾斜地であるが、県下三大河川の一つ吉井川が町の中央を貫流し、流れに沿って国指定名勝奥津渓があり、上流や下流に細長い平地が分布しています。

年々増加の一途をたどる各種の開発等によって、破壊のおそれのある埋蔵文化財、先人の貴重な文化遺産が滅失、散逸することのないようにこれを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務と考え、本町では昭和49年奥津町文化財保護条例を制定し、開発との調整、その保存・保護に努めてまいりました。

昨年5月、町内を縦貫する国道179号線改良工事現場の法面に住居跡を発見し、爾来岡山県教育庁文化課の指示、久米中学校教諭橋本惣司氏の指導のもとに緊急調査を実施いたしました。危険な箇所での工事と並行、しかも短期間の調査ということで十分な調査ができなかったものの、住居跡等未だ発見がなかったわが町にとって、弥生時代後期の竪穴式住居とわかり、さらに西側の丘陵地にも大きな集落があると推定され感嘆のきわみであります。願わくば今後の県北山間の集落研究の一資料として、その営みが解明されることを期待するものであります。

ここに、発掘調査を終了し、ささやかではございますが報告書を発刊いたしました。発掘から報告書にいたるまで、多大のご協力をいただいた関係の諸賢に感謝を申し上げるとともに、本書が文化財保護の資料として広く御活用いただければ幸甚であります。

平成5年3月31日

奥津町教育委員会

教育長　駒　井　祐　平

例　　言

1．本書は、国道179号線改良工事に伴い、岡山県津山地方振興局の委託を受けて、奥津町教育委員会が実施した「土路江（とろえ）遺跡」の発掘調査報告書である。

2．遺跡は、岡山県苫田郡奥津町奥津川西914-6番地に所在する。

3．現地での発掘調査は、1992年5月14日から6月15日まで実施し、その後、遺物整理、本書の作成を行った。

4．発掘調査の経費については、岡山県津山地方振興局の負担によるものである。

5．発掘調査は、橋本惣司氏（久米郡久米中学校教諭）に依頼した。

6．本書の執筆・編集は橋本惣司氏が行った。

7．本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は磁北である。

8．遺構の写真撮影は、光永雅彦が行い、遺物の写真撮影は山崎政弘氏に依頼した。

9．出土遺物、実測図、写真、フィルム等の資料は奥津町教育委員会において保管している。

10．第2図に使用した「土路江遺跡と周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行2万5千分の1「奥津」を複製したものである。

本　文　目　次

巻頭カラー図版

はじめに

例　　言

Ⅰ　調査の経緯 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査体制 …… 2

3　調査日誌 …… 3

Ⅱ　地理的歴史的環境 …… 4

1　遺跡の位置 …… 4

2　周辺の遺跡 …… 4

Ⅲ　調査の記録 …… 7

1　遺構・遺物 …… 9

(1)　住居址 …… 9

(2)　土　壙 …… 19

(3)　遺構に伴わない遺物 …… 23

Ⅳ　まとめ …… 24

挿　図　目　次

第１図　奥津町の位置図 …… 4
第２図　周辺遺跡分布図 …… 5
第３図　遺跡位置図 …… 7
第４図　遺跡全体図 …… 8
第５図　１号住居址断面図 …… 9
第６図　２号住居址平・断面図 …… 10
第７図　２号住居址（掘上後）平・断面図 …… 11
第８図　２号住居址堆積土出土遺物 …… 13
第９図　２号住居址床面出土遺物 …… 14
第10図　２号住居址（旧）土壙出土遺物 …… 14
第11図　３号住居址平・断面図 …… 15
第12図　３号住居址出土遺物 …… 16
第13図　３号住居址土壙出土遺物 …… 16
第14図　４号住居址平・断面図 …… 17
第15図　４号住居址床面出土土器 …… 18
第16図　４号住居址出土石器 …… 19
第17図　土壙１平・断面図 …… 20
第18図　土壙２平・断面図 …… 21
第19図　土壙３平・断面図 …… 21
第20図　土壙４平・断面図 …… 22
第21図　土壙５平・断面図 …… 23
第22図　遺構に伴わない遺物 …… 24

図　版　目　次

図版１－１　土路江遺跡発掘調査前遠景（北東から）
　　２　遺跡から石引山古墳・寺原遺跡を望む（北西から）
　　３　２号住居址遠景（南から）
図版２－１　１号住居址（東から）
　　２　１号住居址（南東から）
　　３　２号住居址発掘風景（西から）
　　４　２号住居址遺物出土状況（北西から）
図版３－１　２号住居址花崗岩出土状態（南東から）
　　２　２号住居址中央穴（西から）
　　３　２号住居址土器出土状態
　　４　復元した土器
図版４－１　２号住居址（北から）
　　２　土壙１（南から）
　　３　２号住居址（北西から）
図版５－１　３号住居址（北東から）
　　２　３号住居址土壙(奥)・土壙３(手前)（東から）
　　３　３号住居址土壙（北から）
　　４　３号住居址土壙遺物出土状態
図版６－１　３号住居址土壙・土壙３（南から）
　　２　土壙発掘調査状況
　　３　３号住居址床面焼土（東から）
　　４　３号住居址（東から）
図版７－１　４号住居址検出状況(南西から)
　　２　４号住居址発掘状況（西から）
　　３　４号住居址遺物出土状況（北東から）
　　４　調理・作業台の石
図版８－１　４号住居址遺物出土状態（西から）
　　２　４号住居址遺物出土状態（南西から）
　　３　４号住居址遺物出土状態（南西から）
図版９－１　４号住居址中央穴（南から）
　　２　４号住居址（北西から）
　　３　３号住居址(右)・４号住居址(左)・土壙２(中央)（北から）
　　４　発掘・実測風景
図版10－１　３号住居址(手前)・４号住居址(奥)（西から）
　　２　２号・３号・４号住居址（北から）
　　３　土壙２（南から）
　　４　土壙２
図版11－１　土壙４検出状況（北東から）
　　２　土壙４（北から）
　　３　土壙５検出状況（北東から）
図版12－１　土壙５（西から）
　　２　遺跡発掘調査後遠景（東から）
　　３　奥津小学校児童遺跡見学
図版13－１　工事完了後遠景（東から）
　　２　１号住居址保存状況（北から）
　　３　工事完了状況（北から）
図版14　出土遺物(1)
図版15　出土遺物(2)
図版16　出土遺物(3)
図版17　出土遺物(4)

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

苫田郡奥津町奥津川西地区において、国道179号線改良工事が計画され、平成３年12月に岡山県津山地方振興局から、奥津町教育委員会に文化財に関する照会があった。計画区間における周知の遺跡等は存在しないが、工事中に埋蔵文化財等と認められるものを発見した場合は届け出ることを付し回答した。

工事現場は、通称「クズレ」と呼ばれ、過去何回か災害により土砂崩れがおき、国道を埋め、吉井川までもせき止めたこともある危険な場所であり、既設国道から高さ30m以上ある急傾斜な法面を拡幅のため切り取る計画であった。

工事着手は、積雪等の影響で予定を大きく遅れて、平成４年５月となり５月13日に、町教育委員会職員が工事現場を見回り、法面切り土部分に住居跡の断面を発見した。このため、工事現場責任者へ遺構の検出を伝え工事を中止した。

当時リゾート開発計画に伴う埋蔵文化財分布調査を、久米郡久米中学校教諭橋本惣司氏に依頼し実施中であり、同氏に確認を願った。

この時点で、既に３分の２以上が切り取られており、残っておる部分のトレンチ調査を実施したところ、遺物の出土と住居跡床面と思われるものを確認したため、原因者である津山地方振興局へその旨を伝え協議した結果、既設国道が吉井川右岸に接していることと、既に工事の進捗状況からして計画変更が不可能であり、発掘調査実施の依頼を受けた。

岡山県教育委員会へ連絡し、県文化課職員の派遣を依頼し現地において、津山地方振興局も立ち会いのうえ協議の結果、残っている部分の全面発掘調査を行うことになった。

遺跡名については、小字名「土路江」をとり土路江遺跡と命名した。発掘にあたっては、業者からパワーショベルの提供をうけ表土の除去を行い、住居跡３軒と貯蔵穴１箇所などを確認する。発掘作業員は、農繁期と重なり確保できず、町教育委員会職員全員と、町文化財審議委員が主体で、工事と並行し行うことになったため、十分な体制とはならず、日を追う事に危険な状態が進み休日返上、落日後も限界まで作業を進めた。調査終了頃には、発掘調査現場へ、工事中の重機の振動が伝わり、遺跡全体が崩壊しかねない状態となり、実測については、町役場産業建設課技師の応援を得た。最終確認では、命綱をつけての法面調査となり、２ヶ所の落し穴を確認・調査し６月15日にすべての調査を事故なく無事に終了した。

発掘調査及び調査報告書作成に要する経費は、津山地方振興局が負担した。

2　調査体制

調査主体	奥津町教育委員会	教育長　駒　井　祐　平
		主　幹　安　藤　真　二
（事務担当）		主　査　光　永　雅　彦
（調 査 員）	久米郡久米中学校	教　諭　橋　本　惣　司

発掘作業員

安藤真二・光永雅彦・坂手祥邦・小林善弘・西村真弓・武本章司・堀内　博・小椋光利・石原善昭・廣野源彰・廣野スマ子・武本あけみ・松隆孝之・小林英将

整理作業員

光永雅彦・廣野スマ子・廣野圭一・坂手貞及・小林百合子

なお、発掘調査から報告書の作成にあたっては、岡山県教育委員会文化課、岡山県津山地方振興局建設部、株式会社河中建設、奥津町役場産業建設課、隣地土地所有者、地元の方々、奥津町文化財審議委員会等のご指導、ご援助を賜った。記して厚くお礼申し上げます。

3　調査日誌

平成４年５月13日	器材搬入、調査準備
	南側のトレンチ調査
14日～19日	２号住居址部分の重機による表土除去作業
	２号住居址掘り下げ
	写真撮影
	遺物出土状態実測
	１号住居址断面実測
６月１日	岡山県教育庁文化課調査指導
２日	南側全体の重機による全面表土除去作業
	遺構検出作業
９日～10日	３号、４号住居址掘り下げ
	土壙掘り下げ
11日	岡山県教育庁文化課調査指導
	２号住居址精査
12日～13日	法面土壙掘り下げ、写真撮影、実測
	遺物出土状態写真撮影
	遺構写真撮影
	実測
15日	器材撤収

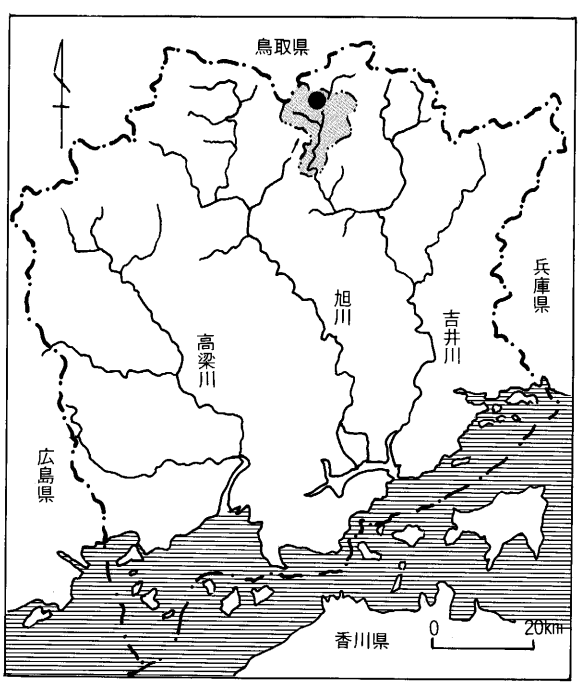
Ⅱ　地理的歴史的環境

1　遺跡の位置

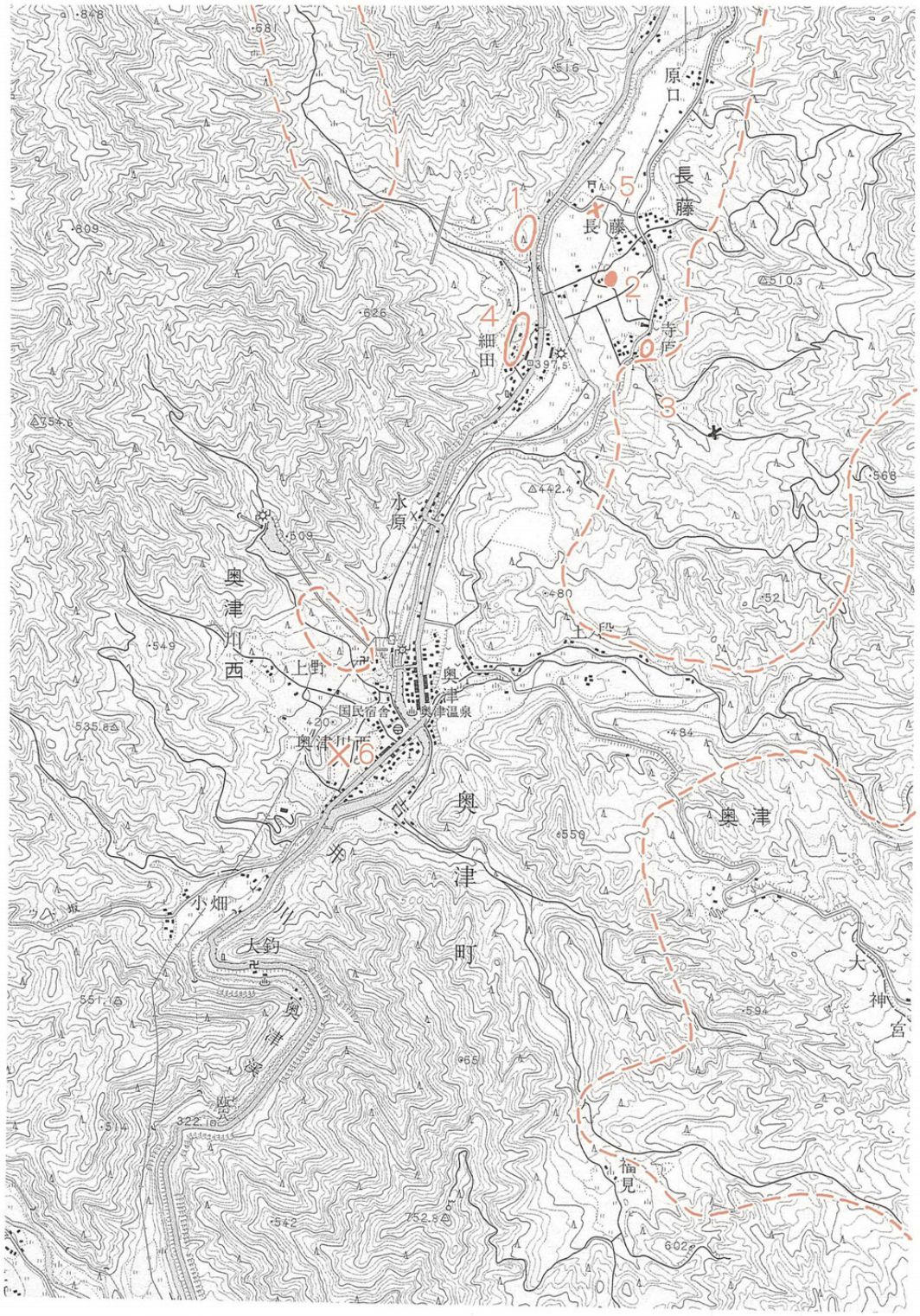
本遺跡は、苫田郡奥津町奥津川西914-6番地に所在する。中国山地に穿入曲流する吉井川上流域は、細長い低地と奥津渓などの狭隘部が展開する。奥津町域においては、奥津温泉街より約１㎞上流にやや広い長藤低地が広がる。この低地の西端に標高430ｍの高位河岸段丘があり、約40ｍの崖を形成して吉井川に落ちる。崖の直下には国道179号線が吉井川との間を走り、常に崩壊の危険場所でもあり「クズレ」の俗称がある。本遺跡がのっている河岸段丘は風化した花崗岩と、その上に厚さ５～６ｍの円礫をのせ赤土層と黒ボコがおおっている。段丘の山麓部は、背後から近世のかんな流しによる土砂が堆積してゆるやかに傾斜し、水田・畑地・栗園として利用されている。北と南とを小谷が急崖で区画し、南北約130ｍ、東西約120ｍの独立した舌状地形を呈する。遺構は東端の栗園部分で検出された。

2　周辺の遺跡

周辺の遺跡を概観してみよう。昭和57年ごろまで奥津町内の埋蔵文化財は、古墳１基、石庖丁出土地１ヶ所、中世山城３、近世製鉄址数ヶ所という状態であったが、筆者らの分布調査によって多数検出された。長藤低地周辺では、対岸の中位河岸段丘上に寺原遺跡がある。縄文草創期に比定できる石鎗、縄文早期・前期の土器片、黒曜石片、サヌカイト製石鏃が多数出土している。低地は比高２～３ｍの低位面で、弥生後期の二重口縁壺が、奥津神社付近から出土している。また、町内唯一の古墳、石引山古墳がある。封土はかなり流失しており長さ約８ｍの無袖の横穴式石室墳である。また、高台付の須恵器坏身も出土している。「塚原」の字名が残っており、五輪塔や瓦器片も出土しており、長期間にわたって生活地域であったことを物語っている。細田の旧奥津小学校が立地する段丘上には弥生土器の小片が出土している。本遺跡が発見される以前、奥津中学校生徒石原智則君らにより、畑から黒曜石片、サヌカイト製石鏃１、時期不明の土器片少量が採集されていた。いづれにしても本遺跡は、津山盆地より上流域ではじめて遺構を伴う弥生時代遺跡として確認されたことになる。



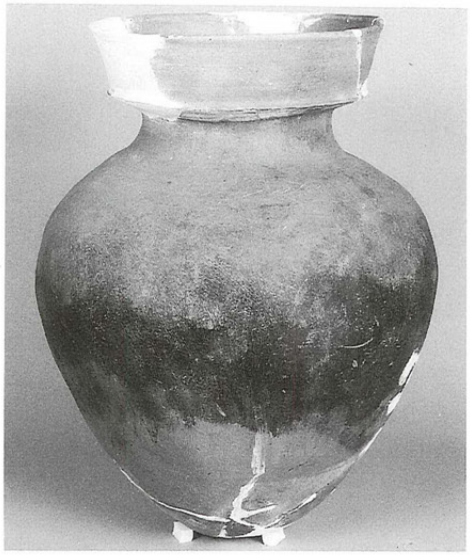
第１図　奥津町の位置図（●印 土路江遺跡）



1 土路江遺跡　2 石引山古墳　3 寺原遺跡
4 弥生土器散布地　5 弥生後期二重口縁壺出土　6 勝間田焼・備前焼出土
タタラ遺跡分布地域

第２図　土路江遺跡と周辺遺跡分布図（1/25,000）

表面採取した遺物
上　サヌカイト製石鏃
下　黒曜石片

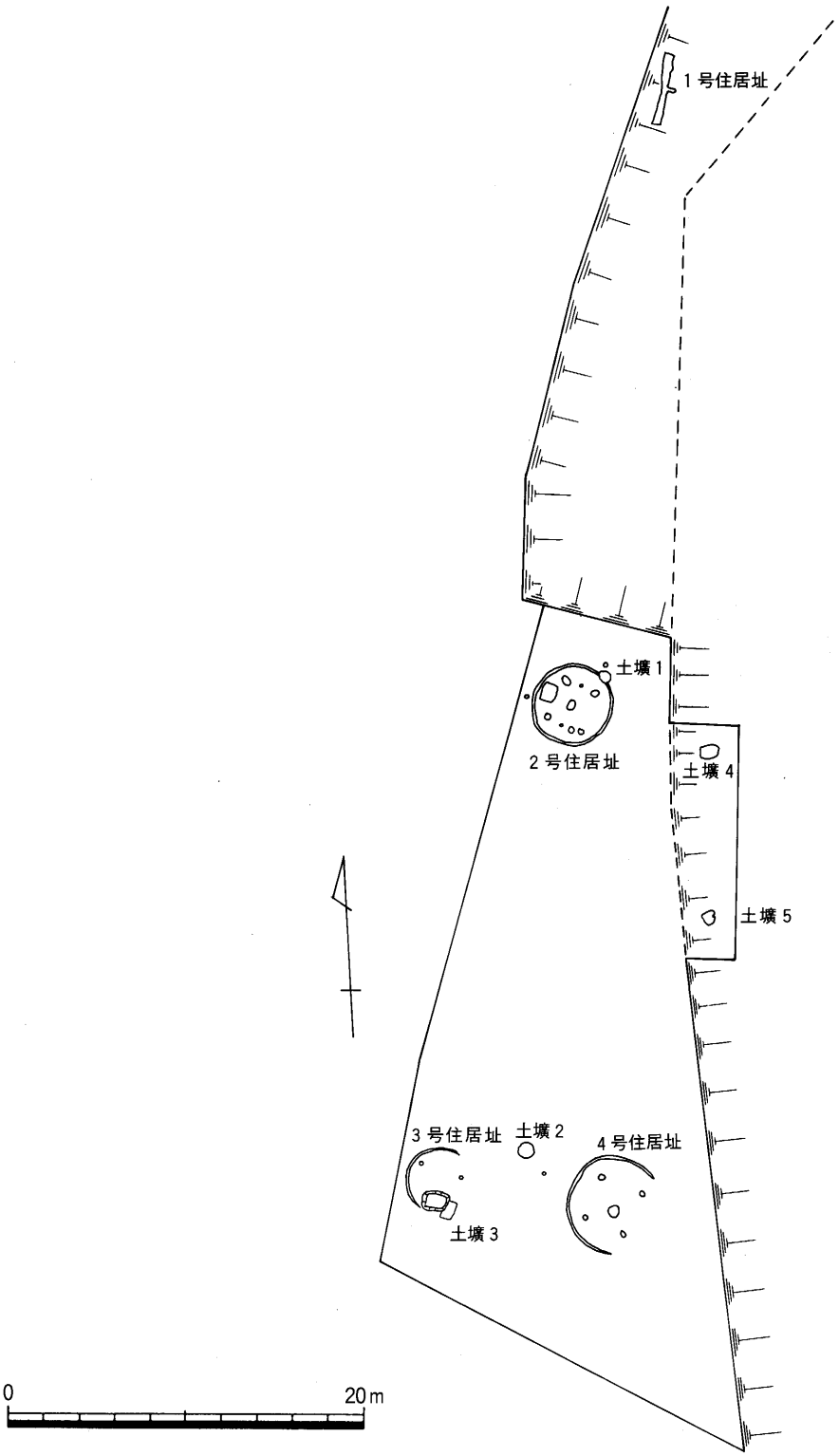


弥生後期二重口縁壺

石引山古墳（北東より）

Ⅲ　調査の記録

第３図　遺跡位置図



第4図　遺跡全体図（1/400）

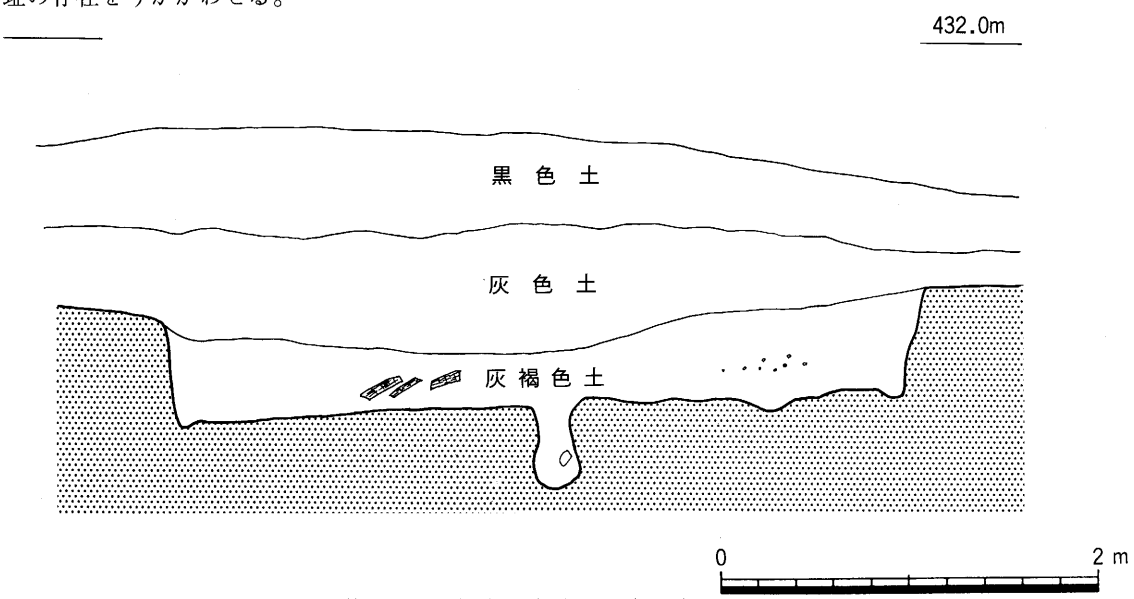
1　遺構・遺物

(1)　住居址

［1号住居址］

調査の経過で述べたように、発見の端緒となった。直径4.2mの竪穴式住居址で、中央穴を切る東半分を掘削されていた。住居址には赤土の混った灰褐色土が堆積し、木炭などを包含していた。床面には土器細片、木炭片、灰がみられ、両端に周溝がめぐり、壁面の高さは59cmを測る。表土をなす黒色土は厚く堆積している。岡山県津山地方振興局のご協力によって、法面に吹きつけ工法により保護している。

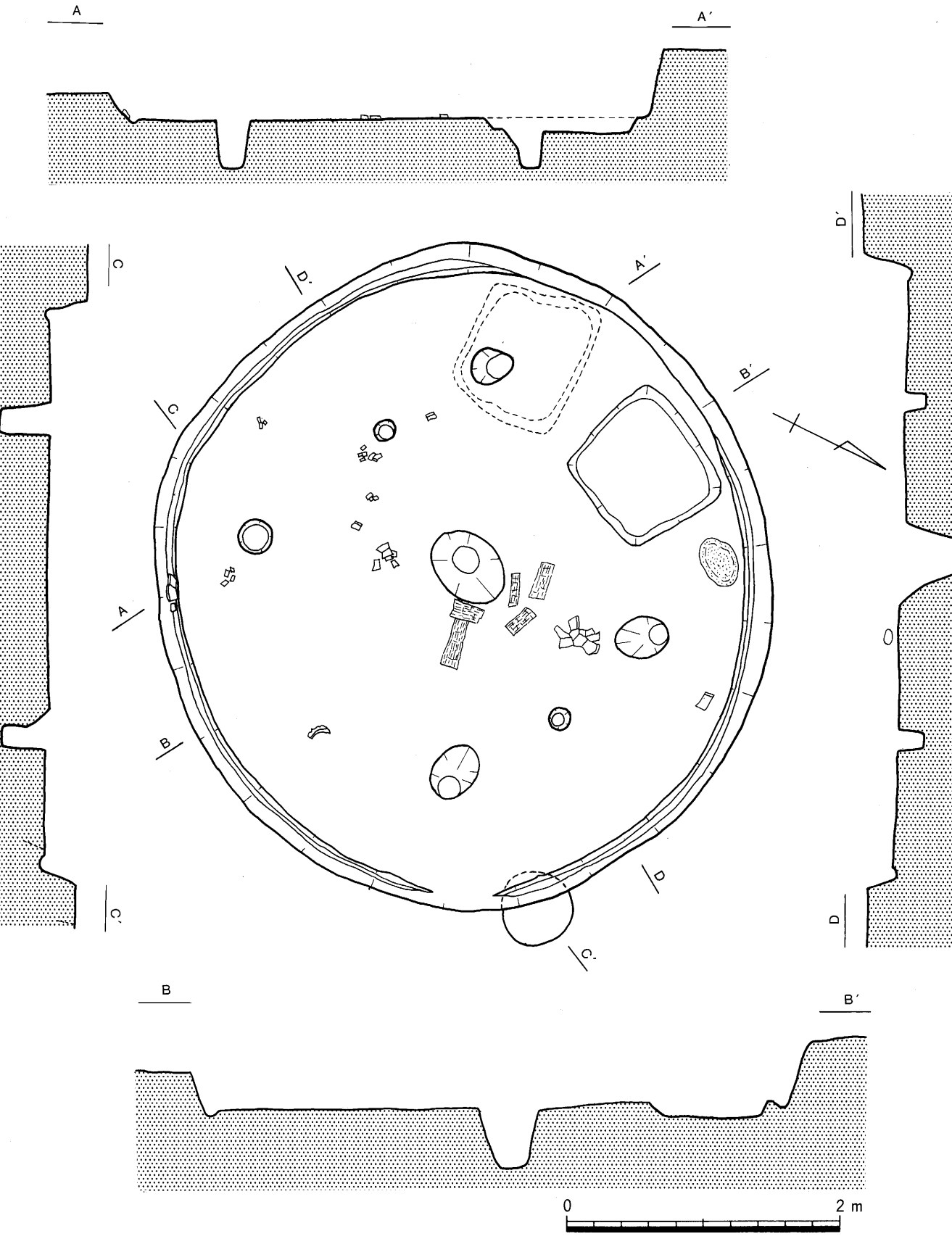
1号住居址の北は黒色土の上に近世のたたら製鉄に伴う砂層がぶ厚くおおっており、弥生時代には3～4m北へ傾いた地形と思われる。その法面に木炭片・土器片も検出しており、住居址の存在をうかがわせる。



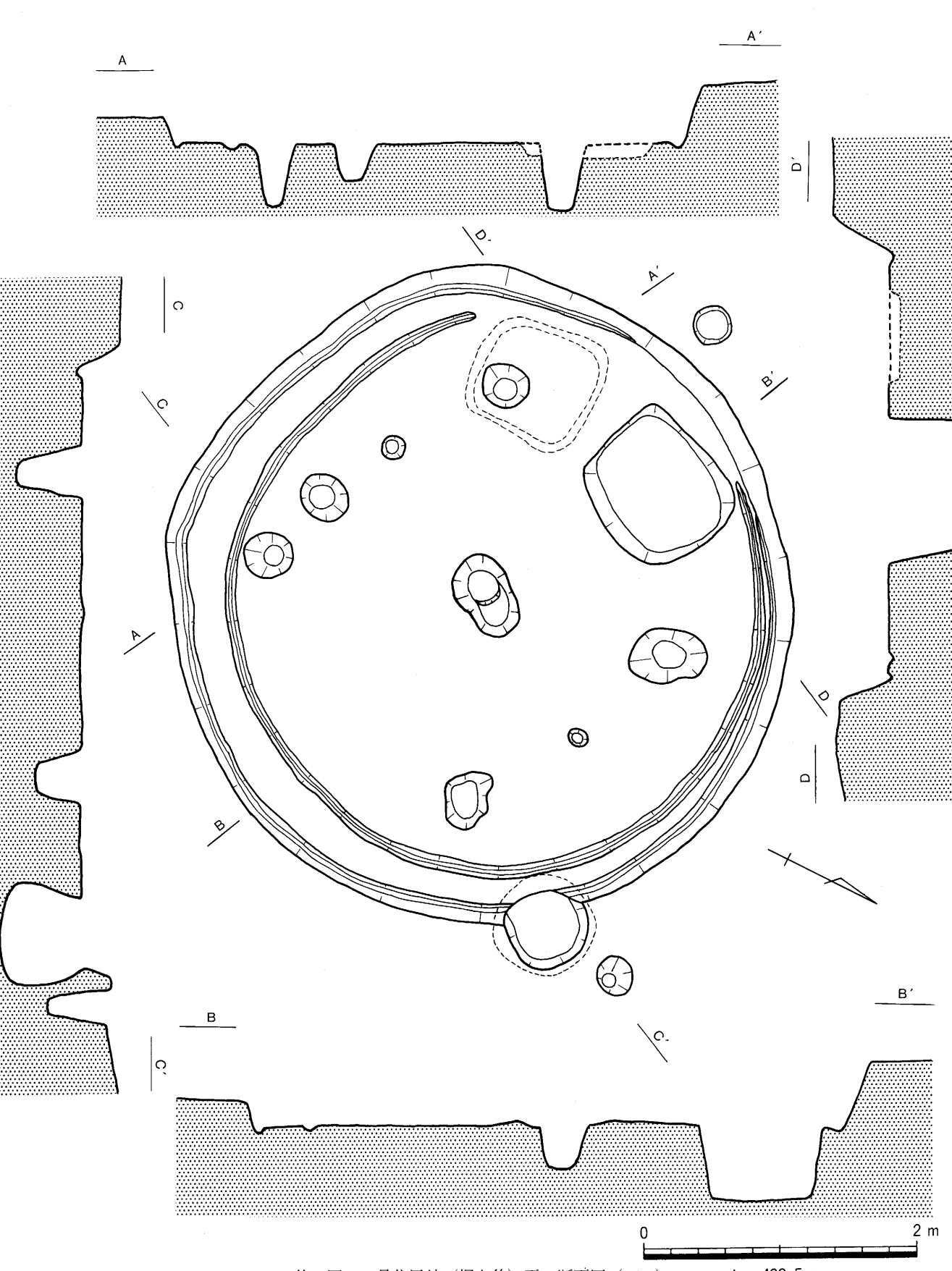
第5図　1号住居址断面図（1/40）

［2号住居址］

台地のほぼ中央部に位置する竪穴式住居址である。表土が厚く保存状態がよい。直径約4.6mのやや変形した円形を呈し、壁面西側は50cm、東側20cmと浅くなっている。浅い周溝がめぐり、4本柱はややひずんだ台形を呈する。柱穴は深さ34cm～46cm、中央穴は楕円形（42cm×63cm）で深さ36cmを測り、土器片・木炭・灰が堆積していた。中央穴をはさんで南北に小さな柱穴があり、主柱の桁の中央の補助柱か、中央穴に伴う柱があったと思われる。中央穴周辺に堅い焼土面がある。床面に土器片が散乱し、北西隅に厚さ11cmの調理台を思わせる花崗岩が置かれていた。西側壁面近くに1辺90cmの隅丸方形の浅い凹みがあったが、後に古い住居址に伴うピットであることがわかった。



第６図　２号住居址平・断面図（1/40）　　L＝432.92m



第７図　２号住居址（掘上後）平・断面図（1/40）　　L＝432.5m

床面を精査する時、巾数cmの浅い溝が西に偏って3.9mの円形に検出され、拡張前の周溝であることが明らかになった。南東柱はやや内側で北東柱はやや東に検出され、他の西側の２本はほぼ共有している。中央穴は北側に少しずれてやや浅いものであった。西側の浅い凹みは拡張時の土で埋められ、色あいでは判別しにくかったが、軟弱で掘り下げると土器片が出土し、深さ56cmのピットであった。

遺物

２号住居址内堆積土出土の遺物（１～18）

２号住居址内の堆積土から出土したもので、**１・２**は長頸壺の破片で口縁端部が上下に伸び外面にやや不明瞭な凹線が２条めぐる。頸部は凹線がなく粗いハケで仕上げている。**３～６**は外面に浅い凹線が施される。**７～10**は外面には凹線がない。**９**は口縁内外に朱塗りが施されている。**11**は端部がやや外傾し、外面に浅い凹線がめぐっている。**13**は二重口縁に近い。**14**は壺の肩部に櫛目の波状文が施され薄い。**15**は高坏の脚で放射状に細かな櫛目がある。堅い焼成で灰褐色を呈する。**16**は小型壺の底部で外面に丹塗りを施している。**17**は小型壺で外反する口縁端部は肥厚する。

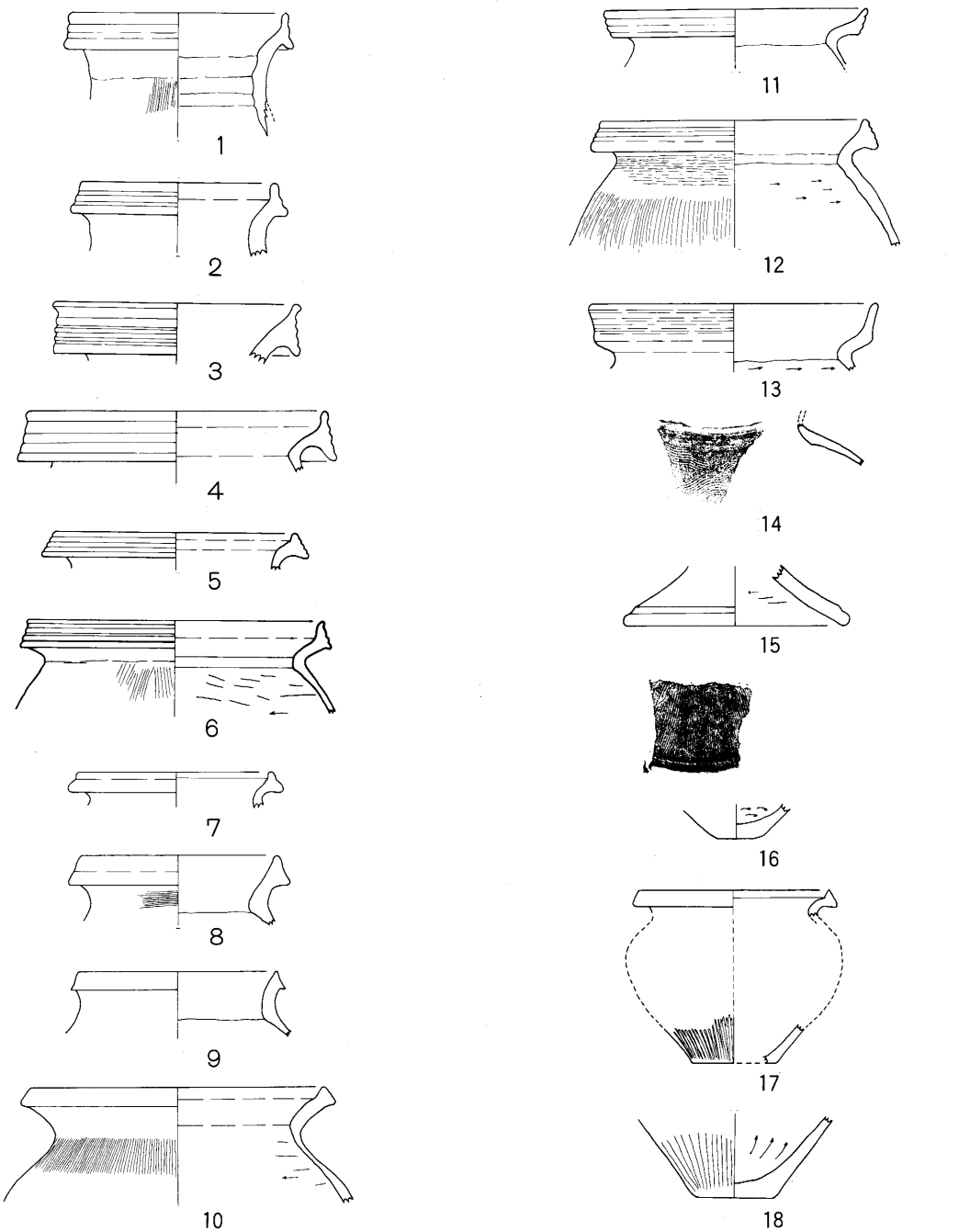
２号住居址の床面出土の遺物（19～24）

19は甕形土器で床面に貼りついて出土した。やや外反する口縁部はしだいに厚くなり、内外面とも横なでで仕上げ、胴部の内側はヘラ削りで頸部内面には粗いハケ目がみられる。外面は粗いハケで仕上げ、ススが付着している。**20**は小型の甕で器高14.5cm、内面はヘラ削りをしているが器壁が厚く、底部には指圧痕がある。底部外面は赤く焼け、腹部はススが付着している。**21**は同一個体で直口壺。口縁部内面と外面に朱塗りで、胎土は黄褐色を呈し良好である。**22・23**は高坏形土器片。**22**は浅い坏部の端部が立ち、水平に外へ拡張して、上面には不明瞭な凹線が５条めぐる。内面はヘラ磨き、坏部外面はヘラ削りで器壁を薄くしている。明褐色を呈する。４号住居址出土の高坏と作りがよく似ている。**23**はやや大きめで内面ヘラ磨き、外面は羽状にヘラ磨きを施している。**24**は北西壁に接して置かれていた花崗斑岩の自然岩で、中央部がやや凹んで磨滅しており調理、作業台として使われたと思われる。

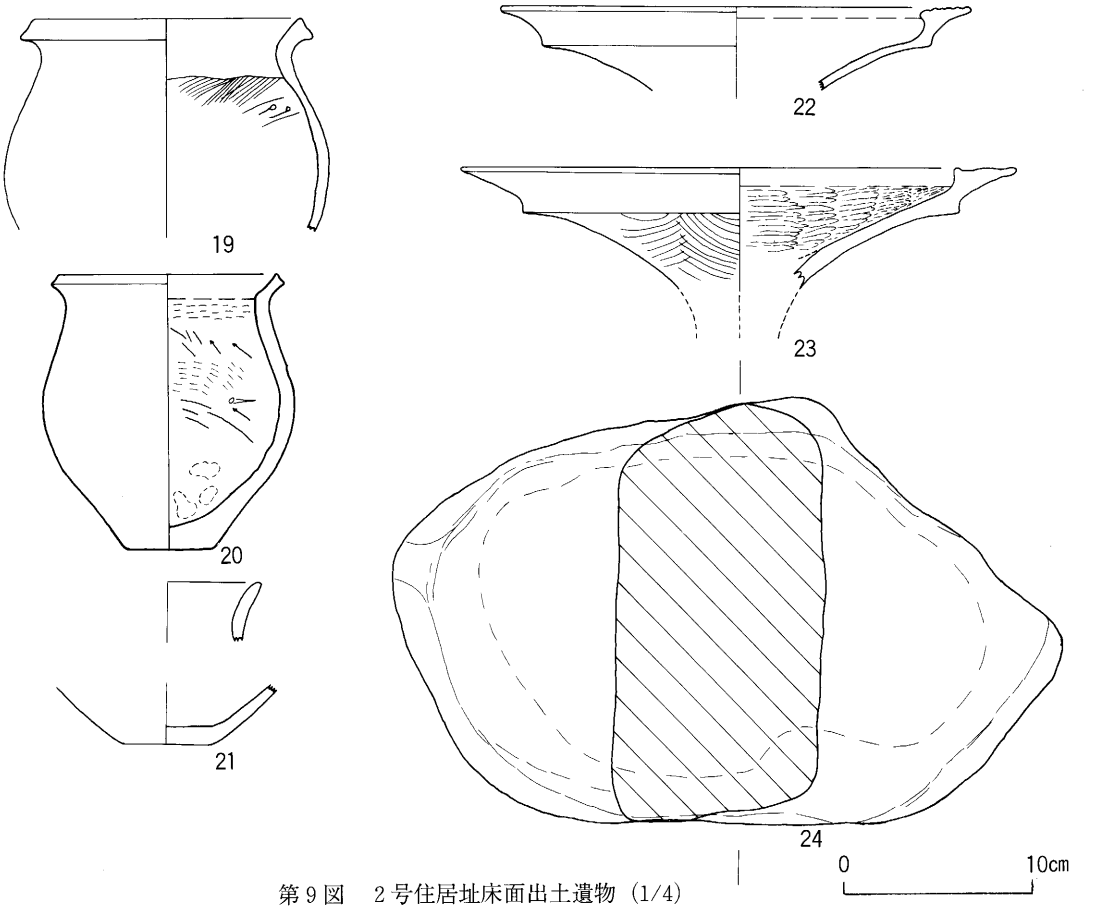
２号住居址内土壙出土の遺物（25～30）

拡張前の住居に伴う遺物は、中央穴から小片が出土した以外は、土壙内より出土した**25～30**の土器片である。**25**は長頸壺の破片でややぶ厚い器壁の頸部は約５cmで、外面には８条の手書きの凹線がめぐっている。内面はしぼり痕がみられ、胴部はヘラ削りによって器壁は薄い。外反しながら肥厚する口縁端部の外面に、不明瞭な凹線が４条めぐっている。**26**は長頸壺の破片で、ぶ厚い器壁の円筒状頸部はゆるく外反して、口縁部が上方へのび丸くおさまる。外面に細いシャープな凹線が２条めぐっている。**28・29**はいづれも壺形土器である。**28**は外反して上下に肥厚する口縁端部の外面に３条の凹線がめぐり、胴部の外面はヘラ磨きで仕上げ、内面はヘラ削りである。**29**は全体的に器壁が薄く、胴部から口縁部まで３～５mmを測る。内面は横位の

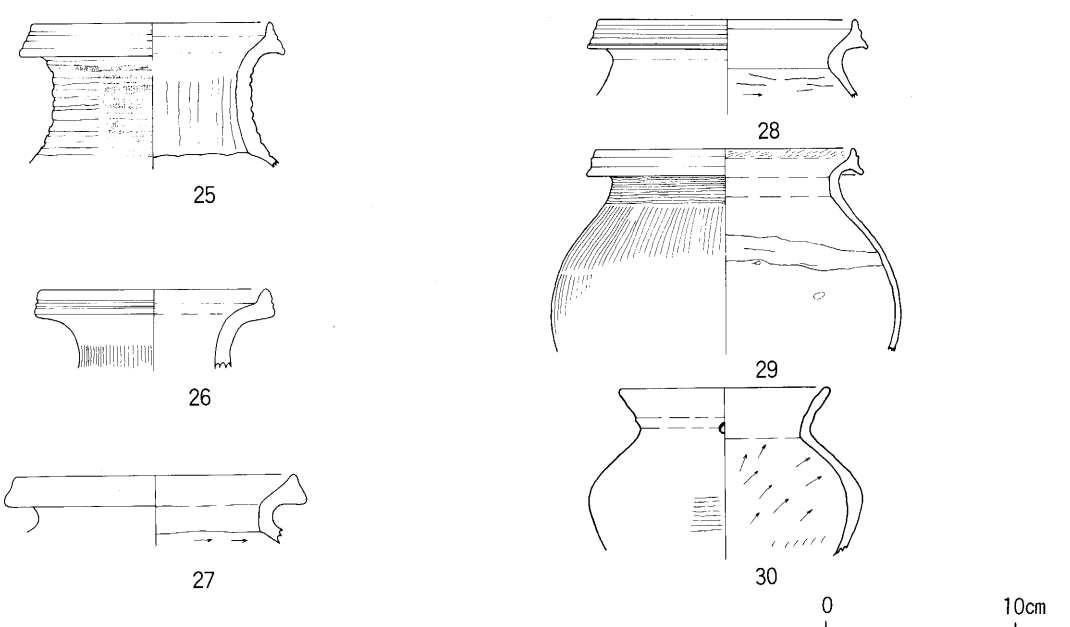
ヘラ削りで、外面は縦位の粗いハケ目が施されている。短い頸部から口縁部は横位のハケ目がみられ、外反して上下にのびる口縁部がつき、外面に不明瞭な２条の凹線がめぐる。外面にはススが付着している。**30**は小型直口壺である。細かな胎土で明褐色を呈する。口径約11cmで胴部の最大径はやや上部に位置し、少し張った感がある。外反する口縁は丸く、内面は横なで、外面はヘラ磨きの手法でていねいに仕上げている。頸部に直径６mmの円孔が穿たれている。



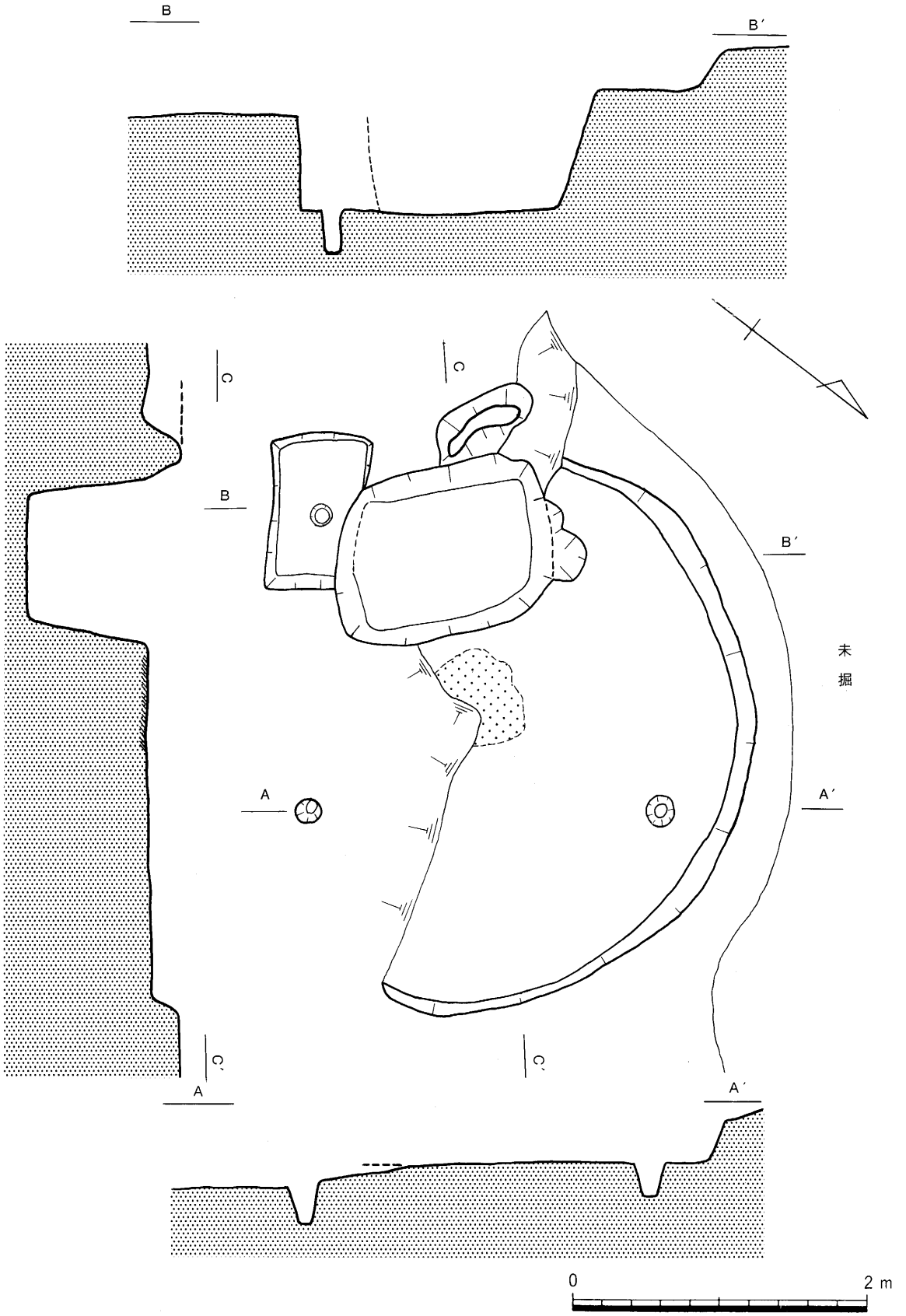
第８図　２号住居址堆積土出土遺物（1/4）



第９図　２号住居址床面出土遺物（1/4）



第10図　２号住居址（旧）土壙出土遺物（1/4）



第11図　3号住居址平・断面図（1/40）　　L＝432.5m

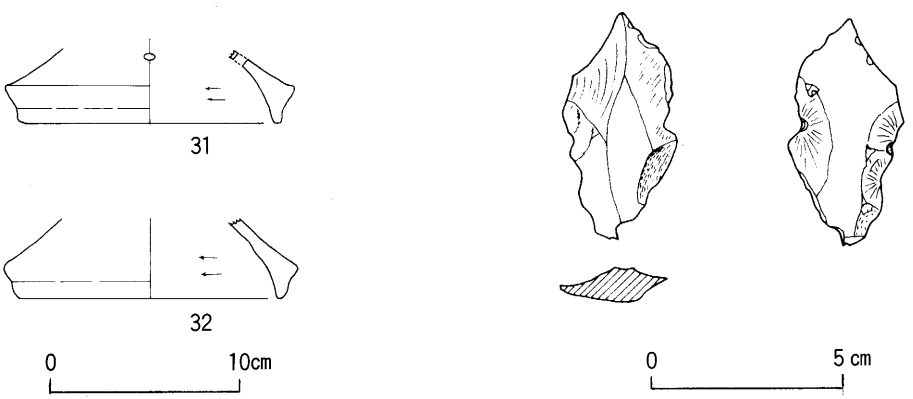
〔3号住居址〕

段丘の西端で検出された直径約3.8mの円形を呈する。南半分は削平されていた。周溝がなく柱穴は小さく2本しか検出されない。また、ほぼ中央部に堅く焼けた部分があり、一般の住居址とは考えにくい。南側に1.4m×1.1m、深さ0.8mの不整形なピットが検出された。このピットの上面から高坏の脚部が出土した。

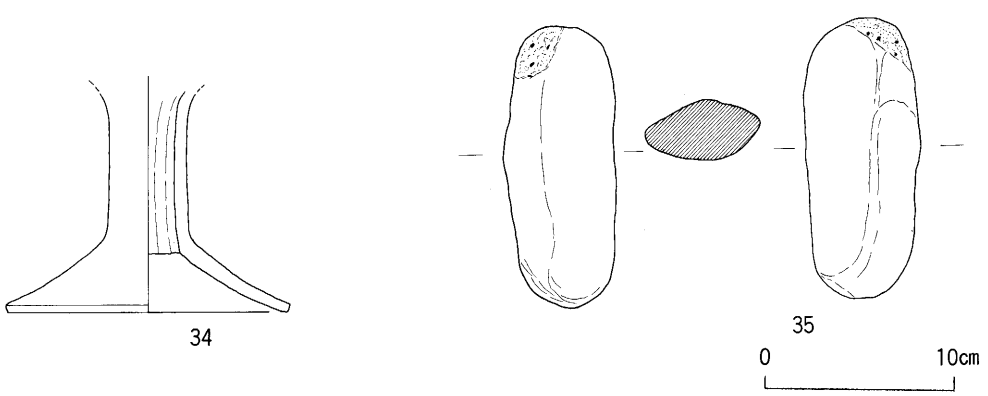
遺物

遺物は少なく堆積土から、サヌカイトの剝片（**33**）が出土した。風化の状態から縄文時代の遺物と思われる。

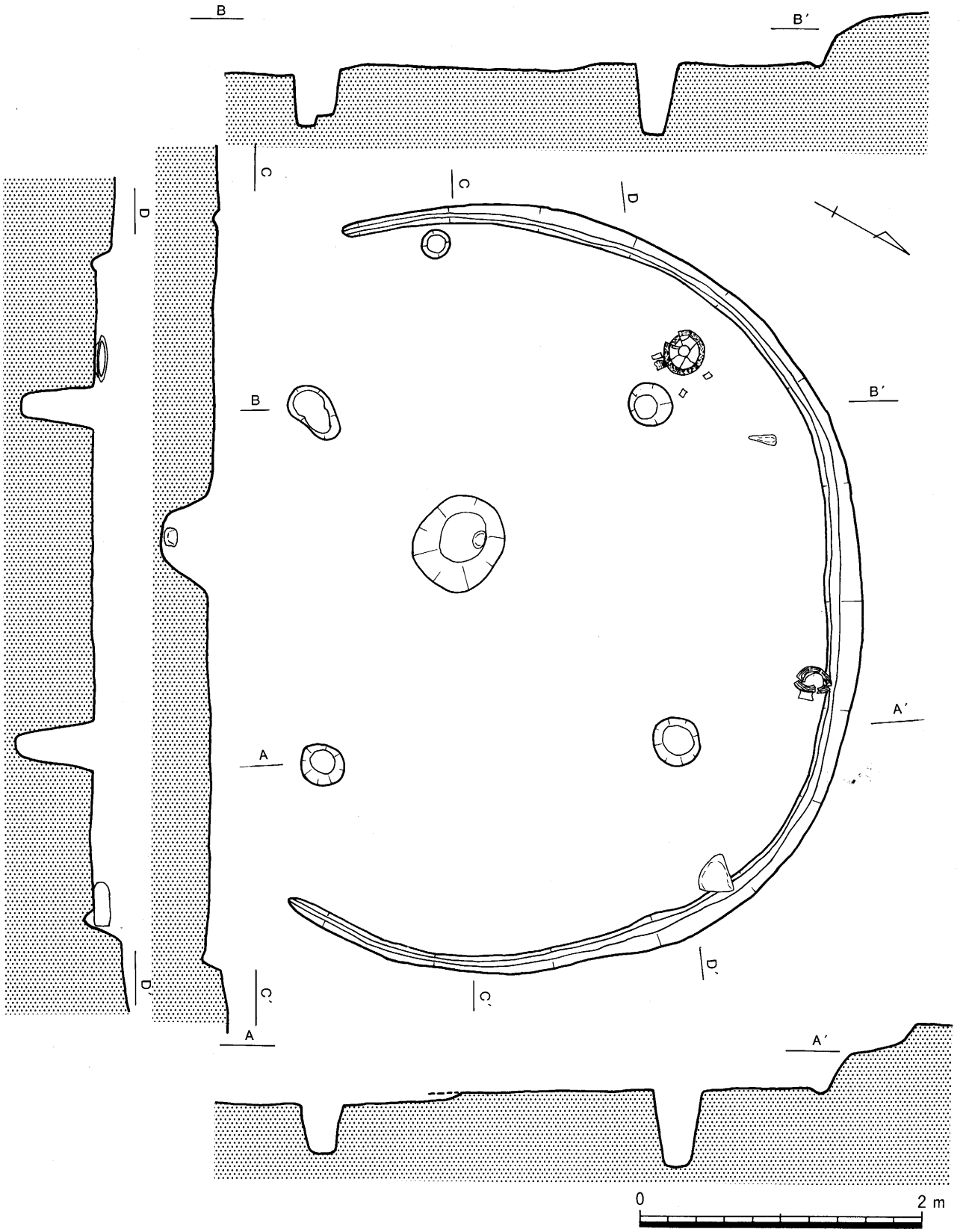
31・32はいづれも器面は赤褐色を呈し、ていねいなヘラ磨きを施し、端部は下方に立ち、外面に不明瞭な凹線がめぐっている。内面はヘラ削りで仕上げている。**34**は円筒状の脚にロート状に裾部がひろがり、端部は方形に切られておさまる。器面はていねいなヘラ磨きの上に赤色に塗られ、胎土は石英粒など含まない。内面にはしぼり痕がみられる。裾部の内面は粗いハケ仕上げである。**35**は土壙内から出土した花崗岩で下端に叩打した痕がみられる。



第12図　3号住居址出土遺物（土器1/4・石器1/2）



第13図　3号住居址土壙　出土遺物（1/4）



第14図　4号住居址平・断面図（1/40）　　L＝432.0m

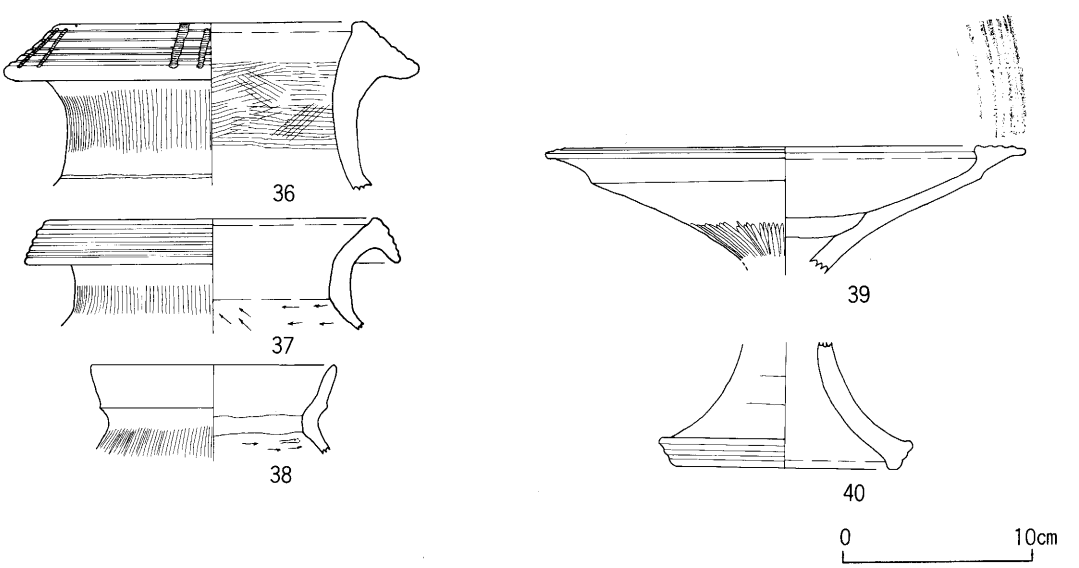
〔4号住居址〕

3号住居址の東に検出された竪穴式住居址で、北側の壁は約25㎝を測り東側の周溝は削平されて残存していない。北東－南西の長さが約5.4mである。4本柱で中央やや南よりに深い中央穴をもつ。柱間は約2.4mで正方形をなす。

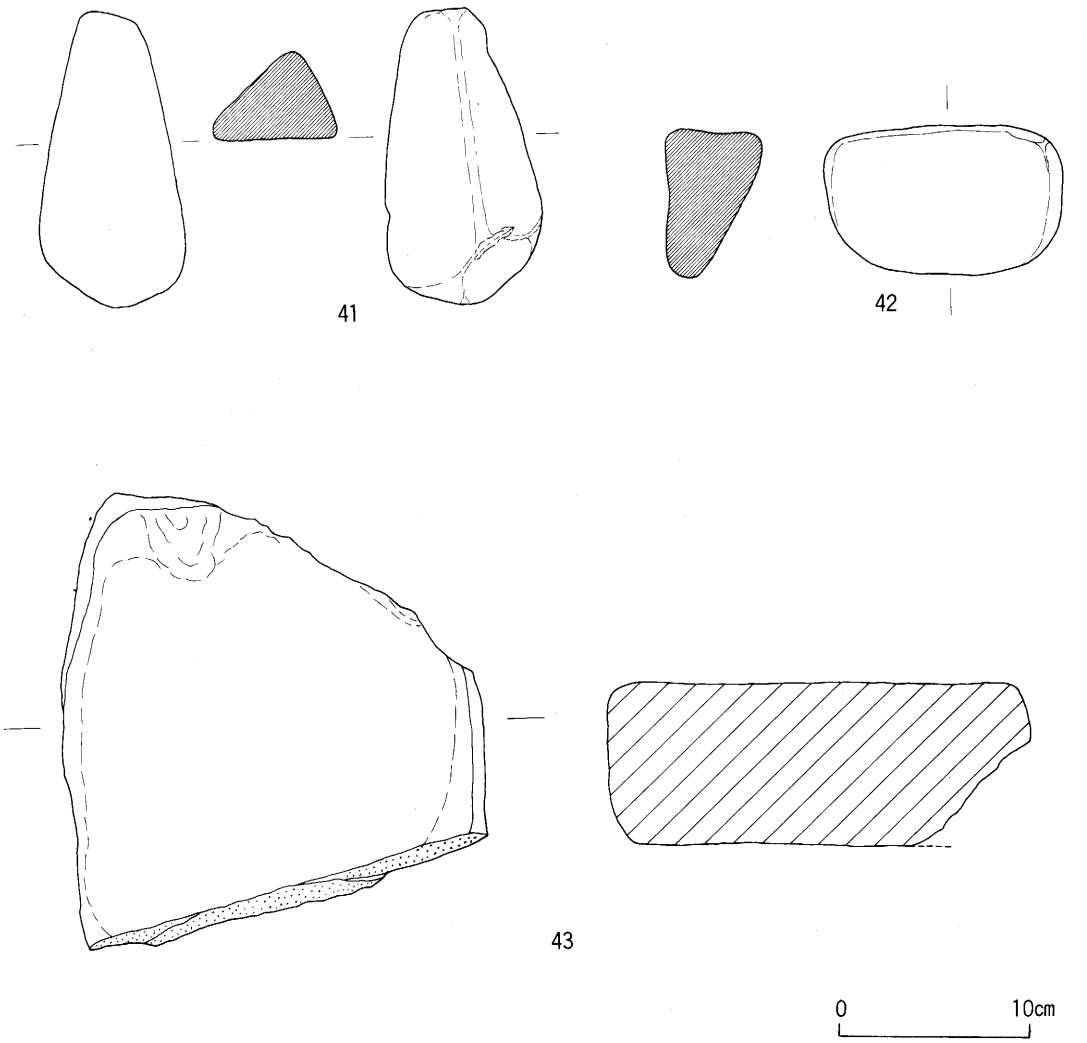
北東壁に接して厚さ約8.5㎝の石が置かれ、北壁に接して壺形土器の口縁部が立てて置かれていた。さらに西柱のそばに高坏の坏部がほぼ完形の状態で出土した。

遺物

堆積土が浅く、遺物はあまり出土していない。**36**は床面の器台として使われたと思われる状態で出土した壺形土器。頸部は円筒をなして外面に縦位、内面に横位の粗いハケ状工具で仕上げ、口縁部は厚く立ちあがって外へ拡張し上面に5条の凹線がめぐる。5ヶ所にハケ状工具による押圧文が2条ずつ施されている。**37**は壺形土器で短い頸部の外面は粗い縦位のハケ目がみられ、口縁部にかけて厚く外反し、端部はやや外へ垂れ下がり、外面に5条の凹線がめぐっている。器面が荒れて胎土に含まれる石英粒がザラザラとしている。**38**は甕形土器で器壁が厚くやや二重口縁を呈し、外傾する口縁部は丸くおさまる。腹部内面はヘラ削り、外面はハケ目で仕上げている。**39**は高坏形土器の坏部で直径25.5㎝で脚部を欠損している。浅い坏部で口縁部は外方に拡大し、上面に5条の浅い凹線がめぐる。坏部と脚部は一続きに作られ、坏部中央の孔は円盤でふさいでいる。円盤接合部分は粗いハケ目が施されている。坏部内外面ともていねいなヘラ磨きで仕上げている。2号住居址床面出土の高坏ときわめてよく似ている。**41**は砂岩製の砥石で断面が三角形をなし、三面に使用痕がある。**42**は中央穴から出土した河原石で叩石と思われる。**43**は花崗斑岩で上面に使用痕がある。



第15図　4号住居址床面出土土器（1/4）



第16図　4号住居址出土石器（1/4）

(2) 土壙

住居址以外の遺構では土壙がある。

土壙1

2号住居址に接して検出された袋状貯蔵穴である。口径0.65mでややくびれて広がり、深さ0.8m、底で0.7mの袋状を呈する。黒色土が堆積しており、遺物はなかった。2号住居址に先行するものである。

土壙2

3号住居址と4号住居址の間で検出された。直径1mの円形で、深さ0.6mのやや胴張りの断面形を呈する。袋状貯蔵穴の上部が削平されたものと思われる。遺物は出土しなかったが、弥生時代の所産と考えられる。

土壙 3

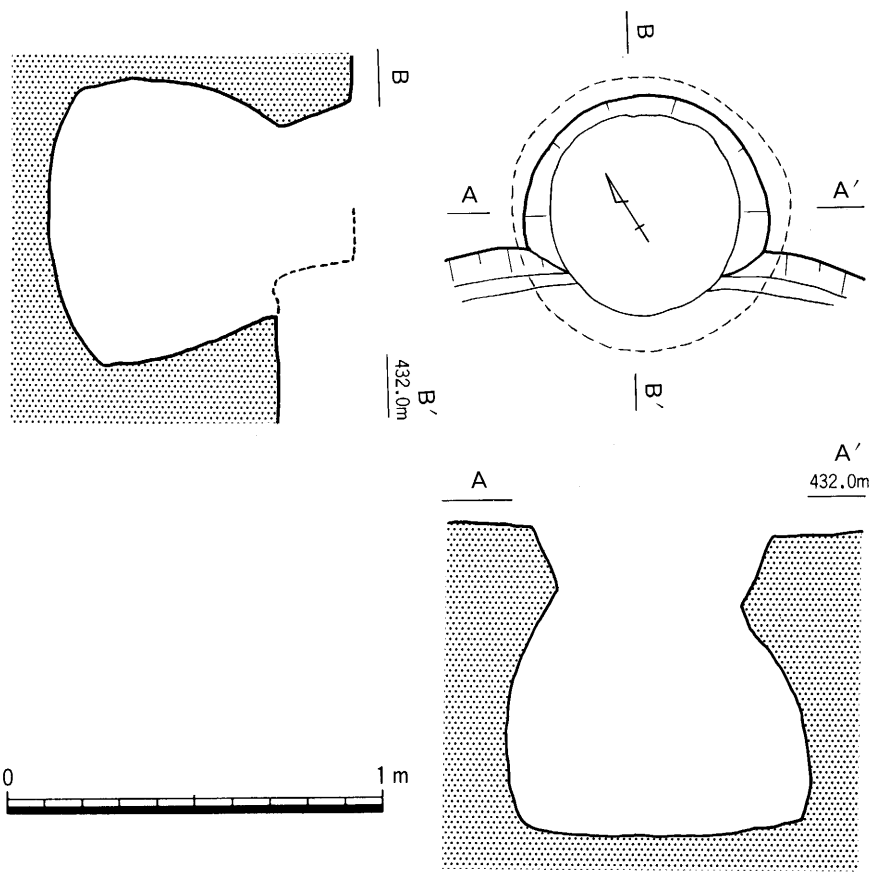
3号住居址内の土壙によって北隅を切りとられた形で検出された。ややいびつな長方形を呈し、長辺1m、短辺0.7m、深さ0.65mを測る。底中央に径0.15m、深さ0.3mの杭穴が穿たれている。黒色土がルーズに堆積して、遺物は出土しなかった。縄文時代の落し穴と考えられる。

土壙 4

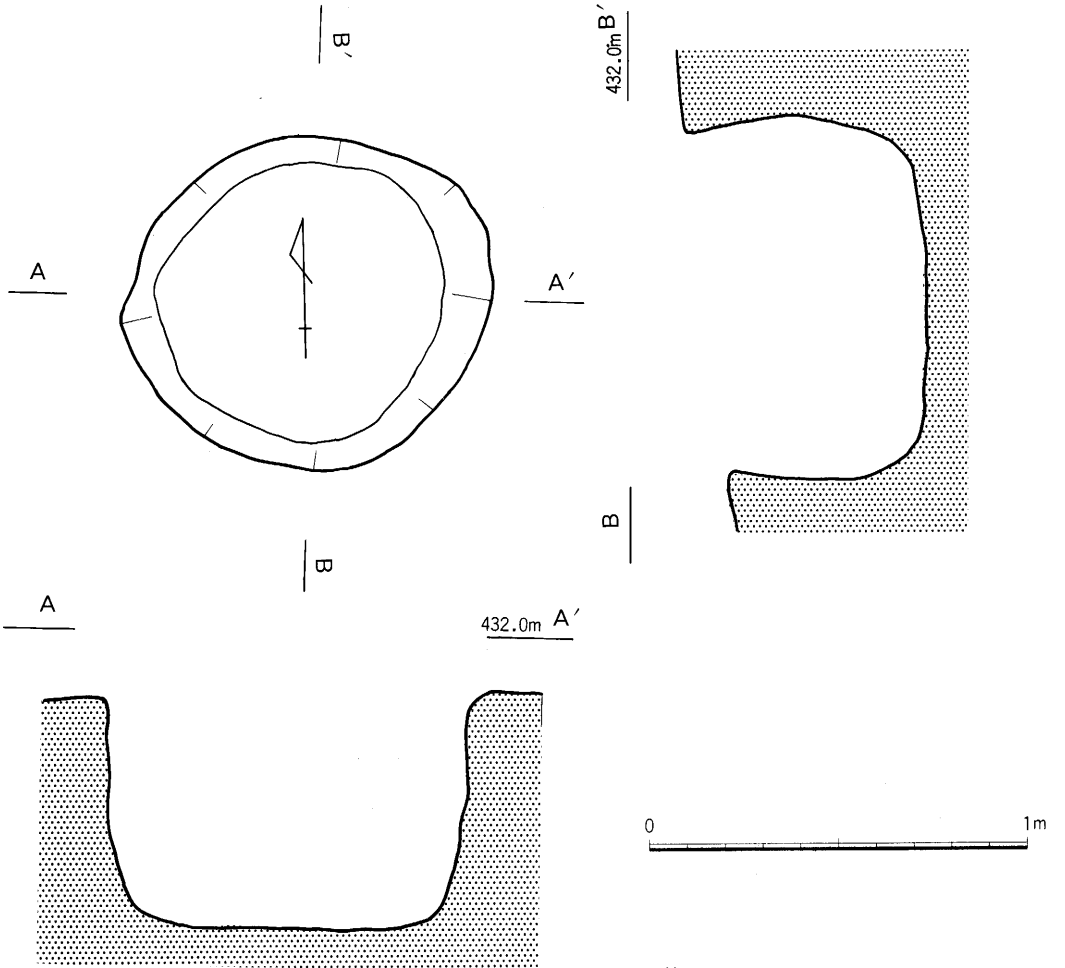
調査終了直前に崖上端で検出された。上部が削平され、底部のみ残っていたが、復元してみると長辺1.3m、短辺0.8m、現地表面からの深さ1.9mになる。さらに0.5m掘り、中央に径0.15mの杭穴を掘って、灰褐色の粘土で杭を支えるようにしている。黒色土が堆積し、遺物は出土しなかったが縄文時代の落し穴と考えられる。

土壙 5

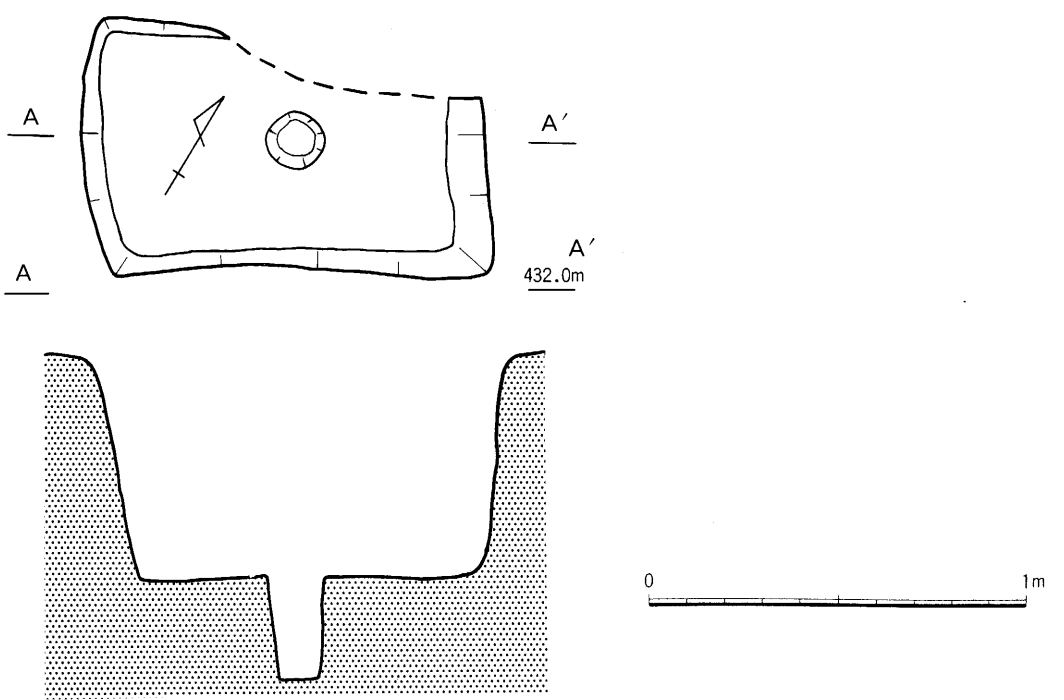
土壙4の南約9mで検出された。底面が半分残った形で、地山礫層を掘削している。長辺1.2m以上、短辺0.7mの長方形を呈し、底面中央に径0.1m、深さ0.6mの杭穴が穿たれている。黒色土が堆積し、遺物は出土しなかった。縄文時代の落し穴と考えられる。



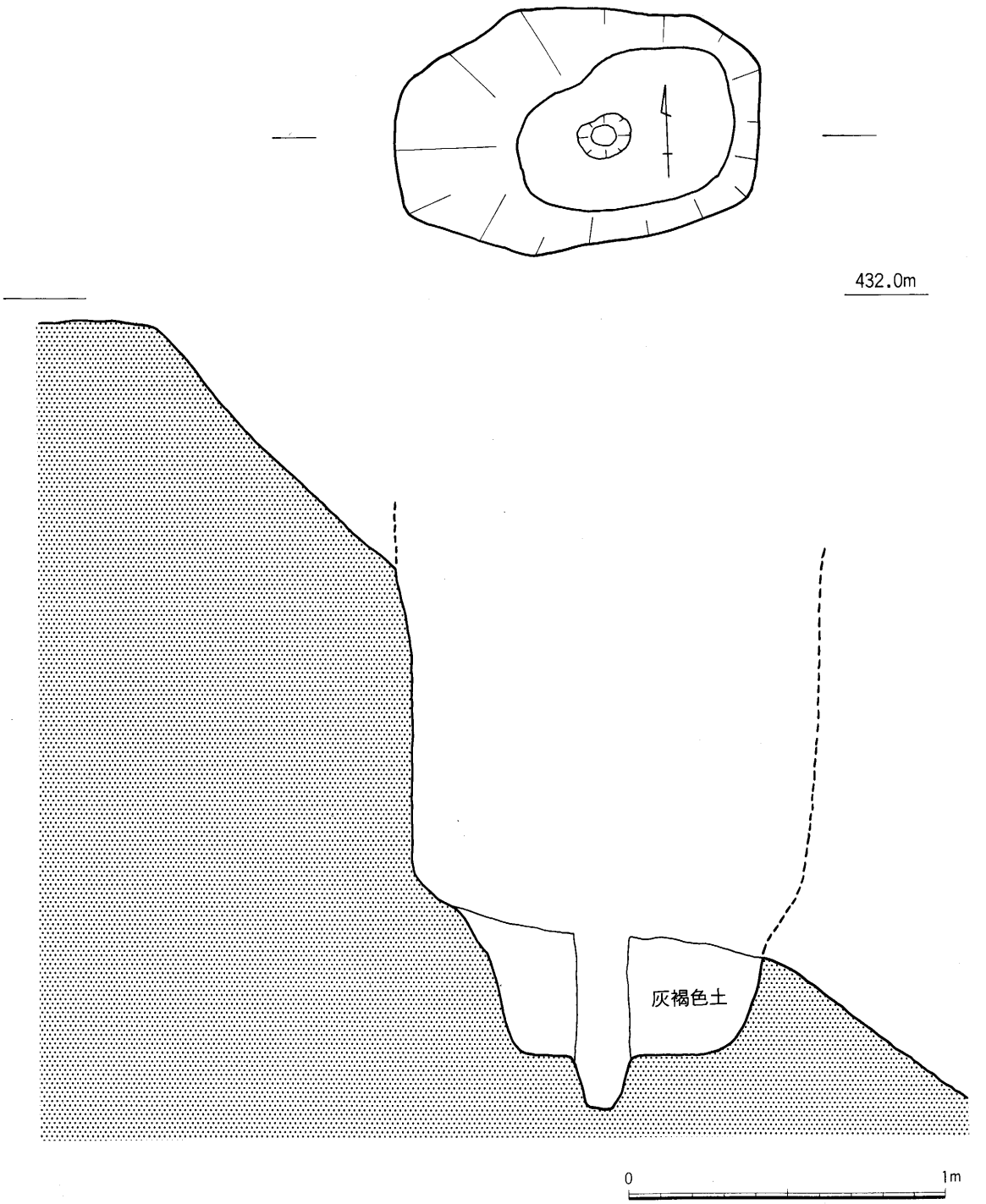
第17図　土壙1平・断面図（1/20）



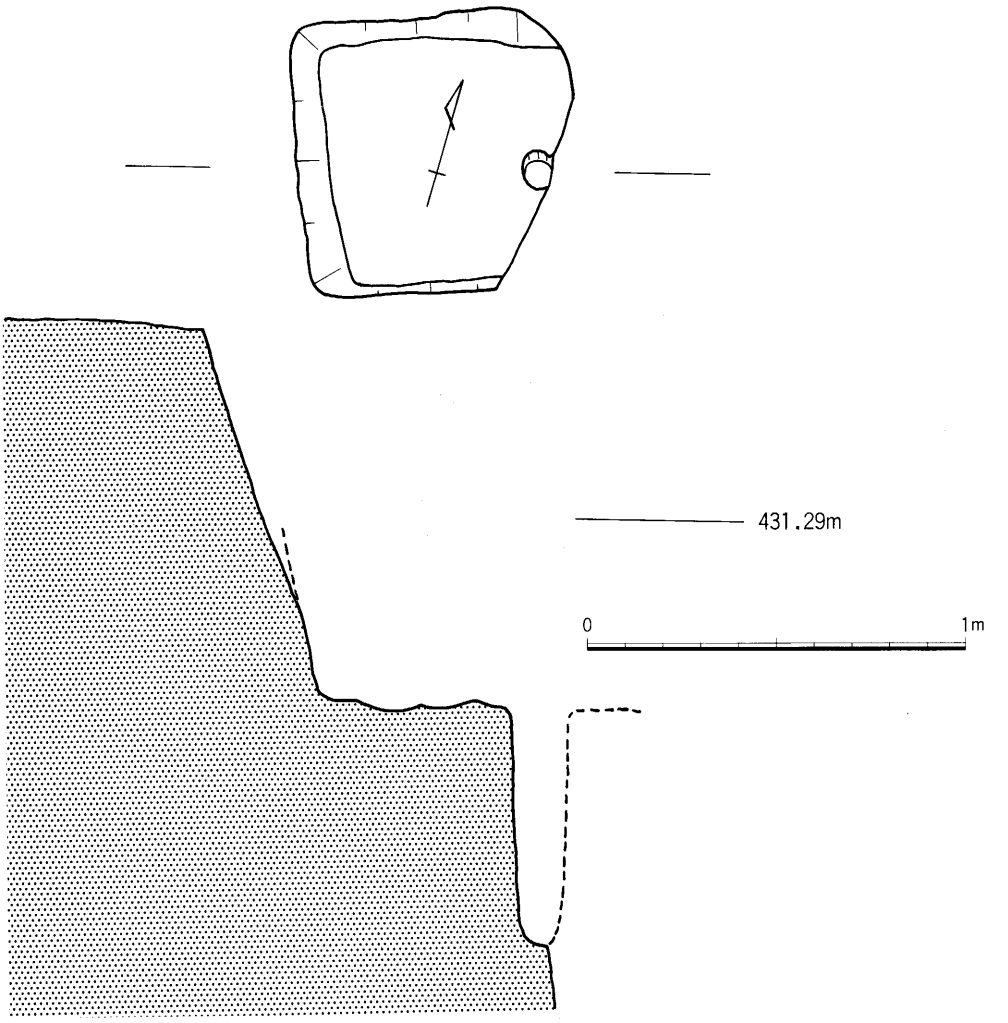
第18図　土壙２平・断面図（1/20）



第19図　土壙３平・断面図（1/20）



第20図　土壙４平・断面図（1/20）

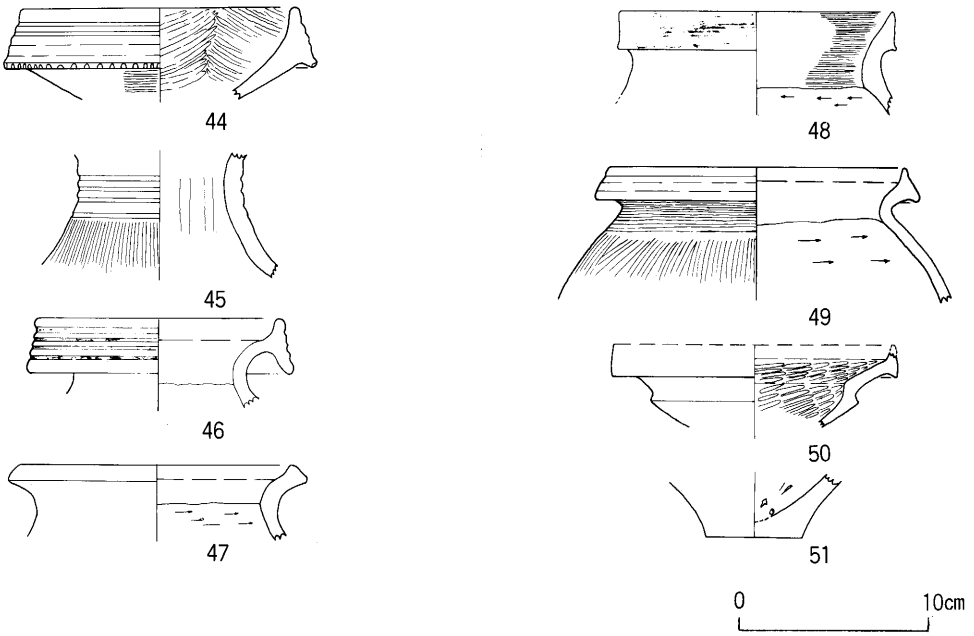


第21図　土壙５平・断面図（1/20）

(3)　遺構に伴わない遺物

本遺跡から出土した遺物量はあまり多くないが、図示できるものは可能なかぎり掲載した。遺構に伴わない弥生土器はつぎのようである。

44は壺形土器の口縁部と思われる。口縁端部が上下に拡張し、外側には凹線と下端にきざみが施され、内側は羽状のヘラ磨きで仕上げている。高坏形土器の脚部とも考えられる。**45**は長頸壺の頸部で４条の凹線がめぐる。赤褐色を呈する。**46**は壺形土器口縁部で、上下に拡張した端部の外面に４条の凹線がめぐる。**49**は外面の凹線が不明瞭であり、**47**は甕形土器でぶ厚い口縁部が外傾している。胎土も良好で暗褐色を呈する。**48**は凹線にかわって櫛状工具による細い８条の線がめぐっている。**50**はやや小型の高坏形土器片で、内外面ともヘラ磨きでていねいに仕上げられている。浅い皿状の坏部が稜をつくって屈折し、外方にひろがり端部が上下に伸びる。



第22図　遺構に伴わない遺物（1/4）

Ⅳ　ま　と　め

土路江遺跡は経過でも述べているように、発見から調査まできわめて緊急的であったが、町当局の意欲的で誠意ある対応によって、かろうじて調査記録と一部遺構を残し、町指定文化財に指定された。吉井川上流域で最初の竪穴式住居址発見という意義も大きく、今後の詳しい地域史の解明につながる端緒ともなった。以下、本遺跡をめぐる所見を述べてまとめとしたい。

表面採集されたサヌカイト製石鏃は、凹基式で表面が風化している。また黒曜石片も採集されている。３号住居址堆積土より出土したサヌカイト剝片も、表面の風化などから縄文時代のものと思われる。調査終了直前に、崖上面で検出した落し穴と思われる土壙は、津山市内でも多く検出されており、縄文時代の所産と考えられる。３号住居址の土壙に切り合って検出された方形の土壙も、同じ性格のものと思われる。対岸の寺原遺跡からは早期・前期の土器や黒曜石、サヌカイト製石鏃が多く出土しており、低地を臨む段丘上は縄文時代の生活面であったことが明らかになった。町内上養野、箱、羽出、井坂、ウド坂等で出土した縄文土器や、上齋原村恩原遺跡などの関連を明らかにしていくことができる資料となった。

吉井川中流域は津山盆地が広がり、弥生時代の遺跡がきわめて濃密な地域となっている。特に、弥生中期から後期にかけて、爆発的に集落が広がりをみせる。その波は中国山地にまで広がり、旭川最上流の蒜山盆地などでは、早くからそれらの存在が確認されていたが、吉井川本流では、鏡野町より上流はV字谷を形成し、狭小な低地しかないため、原始古代人の足跡は極めて少ないとされていた。ただ、奥津町河内から石庖丁、長藤の低地から二重口縁の大型壺と、横穴式石室墳1基が確認されるのみであった。その後、杉・井坂・上養野・羽出で弥生後期の土器片が出土して遺跡の存在の可能性が高まった。

本遺跡が高い段丘上にあり、4軒以上（未掘部分から類推して）で構成される集落址であることが明らかになった。吉井川の浸食によって消失した段丘と、残存する段丘からみて、かなりの数の住居址の存在が考えられる。遺跡の南に谷水田があった可能性がある。さらに、吉井川をさかのぼった丘陵、段丘上に集落が検出される可能性が大きく、恩原高原付近まで、弥生人の足跡をたどることができるかもしれない。

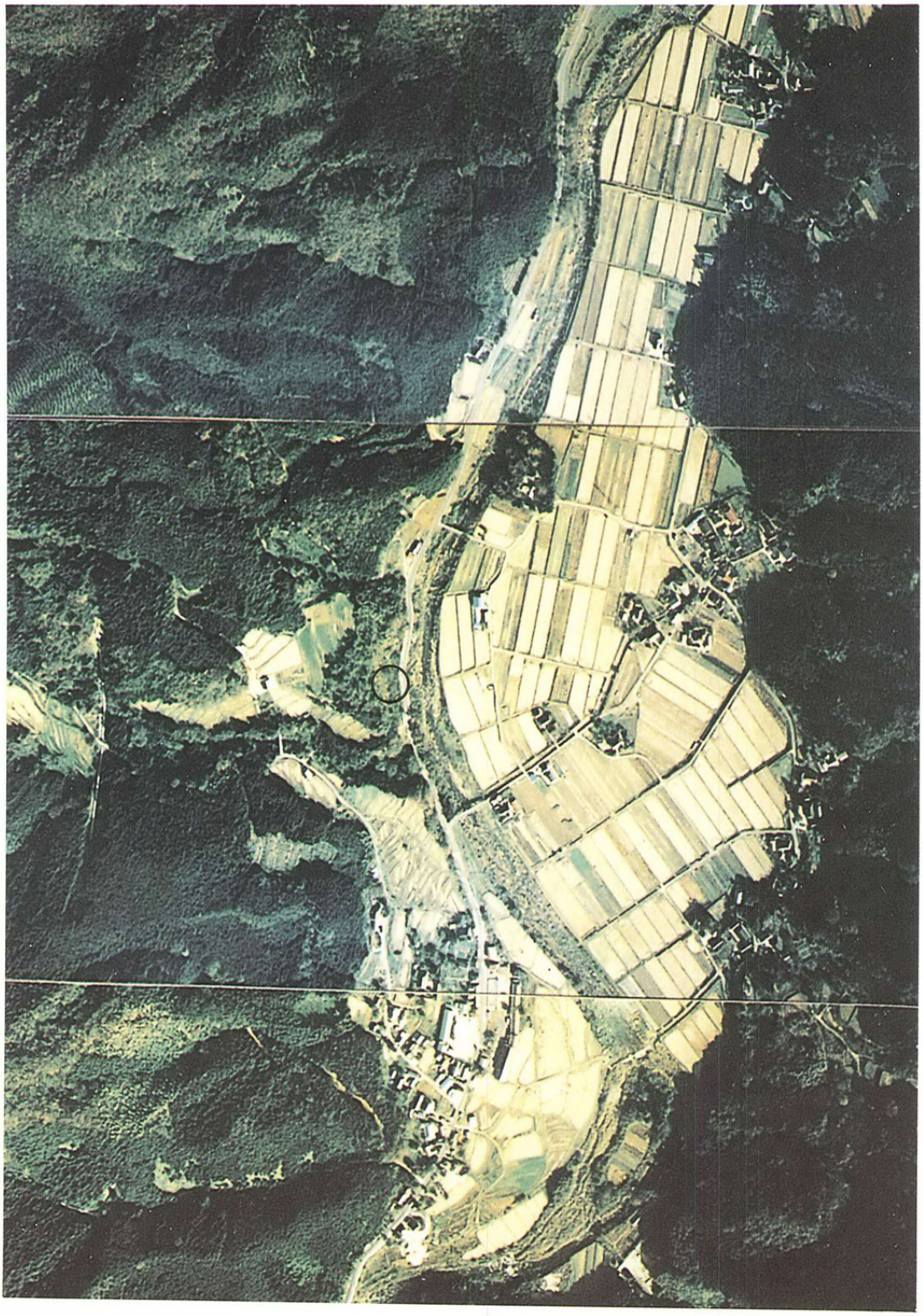
本遺跡の存続期は土器の形式からみて、弥生時代後期初頭から前半期ぐらいと考えられる。2号住居址は拡張されていて、古い周溝と柱穴、中央穴、土壙が確認された。土壙内から出土した甕形土器(28・29) や拡張後の床面出土の高坏形土器(22・23)、4号住居址出土の高坏 (39) は後期初頭に比定できよう。調査が全面に及ばなかったため、2号住居址に先行する袋状土壙と、深い柱穴は時期や広がりを明らかにすることができなかった。1号、2号、4号住居址を埋めた土は、層序が同じで同時期に放棄されたと考えられ、集落は、奥津神社出土の二重口縁の壺型土器（遺跡分布図5）の時期に、長藤の低地へ移動したことが考えられる。

さらに、本遺跡以前の時期、石引山古墳が築かれるまでの奥津町の様子を明らかにしていくとともに、吉井川上流域の古代を解明する努力を重ねなければならない。

参考文献

橋本惣司「吉井川上流域の歴史的研究」 『岡山県教育公務員弘済会教育研究助成』1983
中山俊紀他「大田十二社遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集』津山市教育委員会 1981
行田裕美「ビシャコ谷遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集』津山市教育委員会 1984
行田裕美「西吉田遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985
安川豊史「向林遺跡・中鎌田墳墓」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第29集』津山市教育委員会 1989
安川豊史「上部遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集』津山市教育委員会 1990
行田裕美「一貫西遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集』津山市教育委員会 1990
中山俊紀・保田義治「小原B・稲荷遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集』津山市教育委員会 1990
保田義治「中原遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第37集』津山市教育委員会 1990
行田裕美・小郷利幸・木村裕子「小原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第38集』津山市教育委員会 1991
湊　哲夫「一貫東遺跡」 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』津山市教育委員会 1992

図　　版



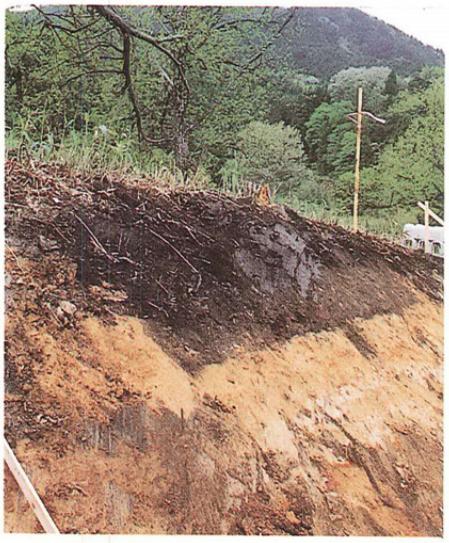
○印 土路江遺跡（写真提供：岡山県津山地方振興局）

1.　土路江遺跡発掘調査前遠景（北東から）

2.　遺跡から石引山古墳・寺原遺跡を望む（北西から）

3.　2号住居址遠景（南から）

1．　1号住居址（東から）



2．　1号住居址（南東から）

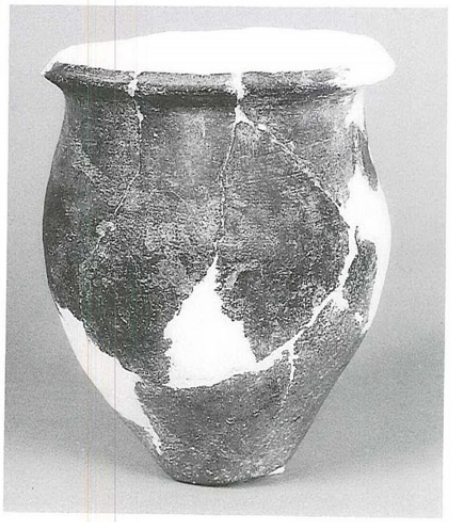
3．　2号住居址発掘風景（西から）

4．　2号住居址遺物出土状況（北西から）

1．　2号住居址花崗岩出土状態（南東から）

2．　2号住居址中央穴（西から）

3．　2号住居址土器出土状態



4．　復元した土器

1.　　2号住居址（北から）

2.　　土壙1（南から）

3.　　2号住居址（北西から）

1.　3号住居址（北東から）

2.　3号住居址土壙(奥)・土壙3(手前)（東から）

4.　3号住居址土壙遺物出土状態

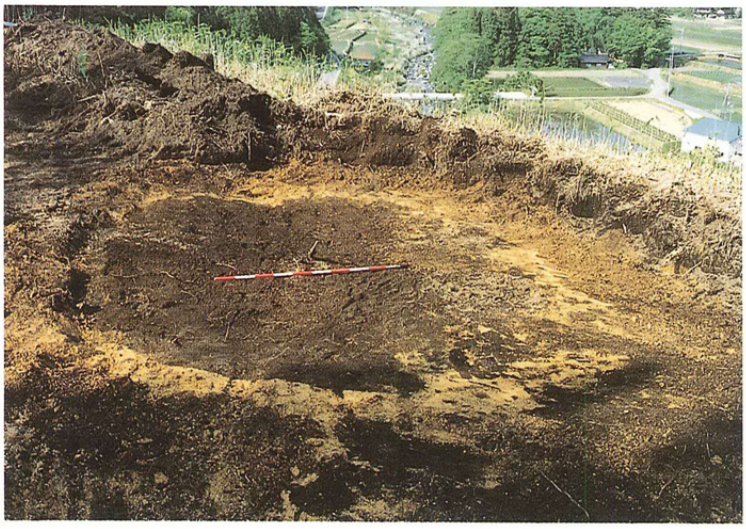
3.　3号住居址土壙（北から）

1.　3号住居址土壙・土壙3（南から）

2.　土壙発掘状況

3.　3号住居址床面焼土（東から）

4.　3号住居址（東から）

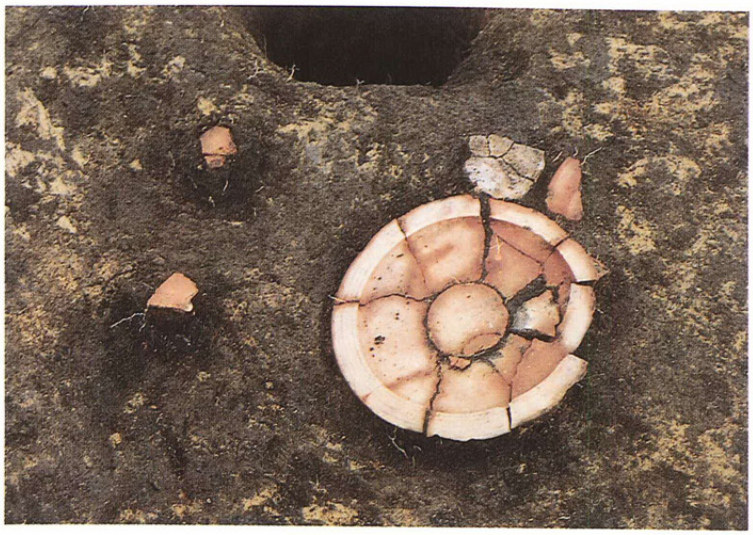


1.　4号住居址検出状況（南西から）

2.　4号住居址発掘状況（西から）

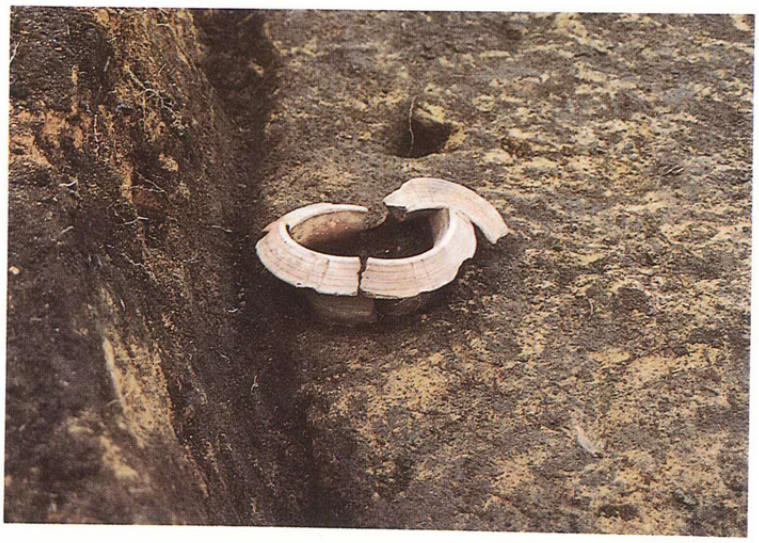
3.　4号住居址遺物出土状況（北東から）

4.　調理・作業台の石

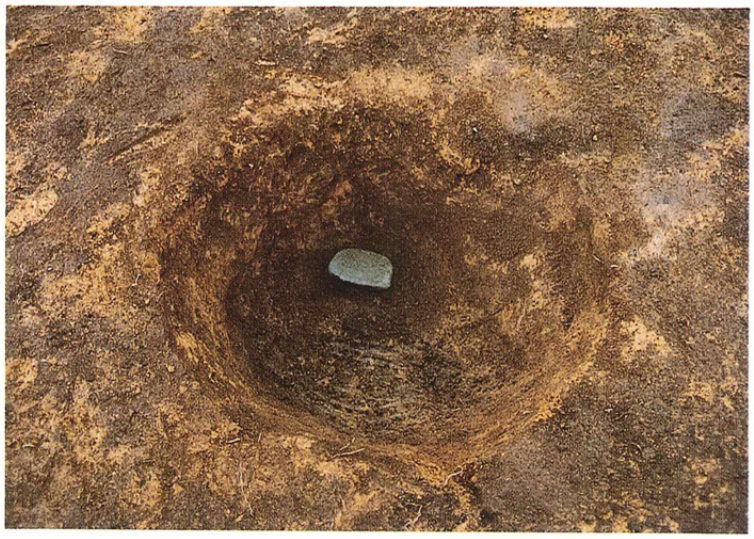


1.　　4号住居址遺物出土状態（西から）

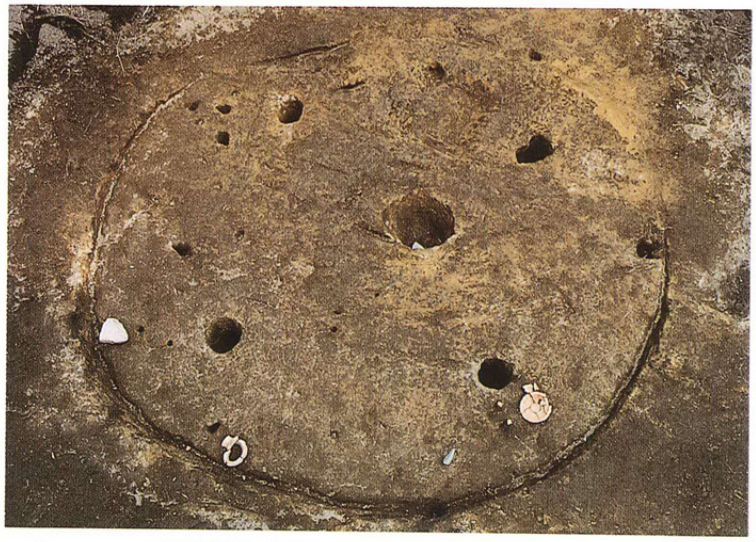
2.　　4号住居址遺物出土状態（南西から）



3.　　4号住居址遺物出土状態（南西から）



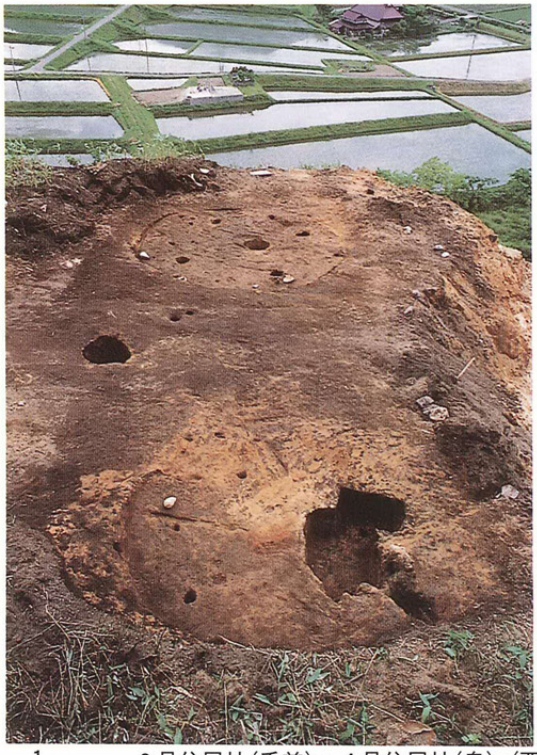
1.　4号住居址中央穴（南から）



2.　4号住居址（北西から）

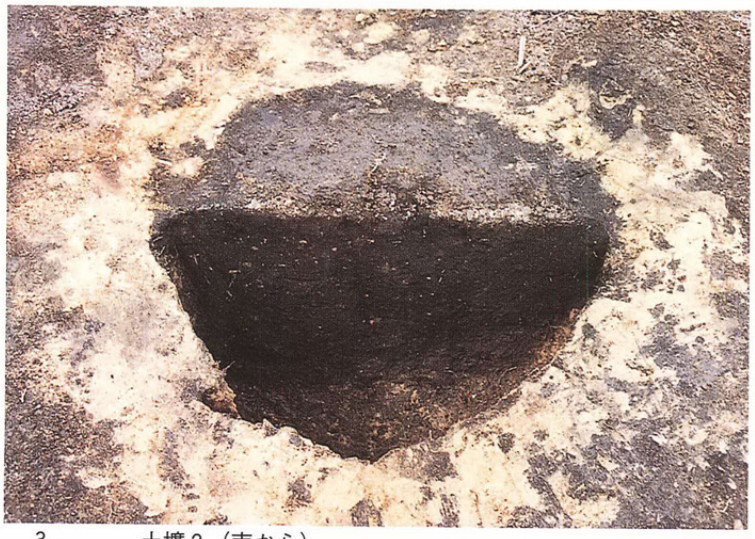
3.　3号住居址(右)・4号住居址(左)・土壙2(中央)（北から）

4.　発掘・実測風景



1.　3号住居址(手前)・4号住居址(奥)（西から）

2.　2号・3号・4号住居址（北から）



3.　土壙2（南から）

4.　土壙2

1.　　土壙４検出状況（北東から）

2.　　土壙４（北から）

3.　　土壙５検出状況（北東から）

1.　土壙５（西から）

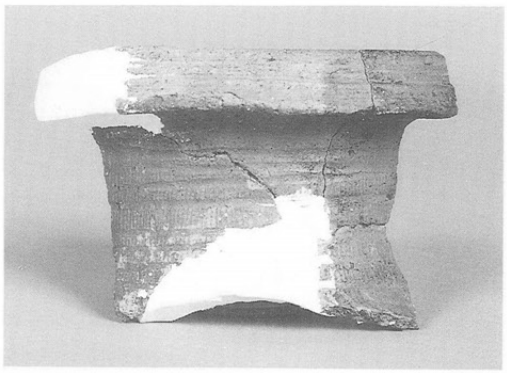
2.　遺跡発掘調査後遠景
（東から）

3.　奥津小学校児童遺跡見学

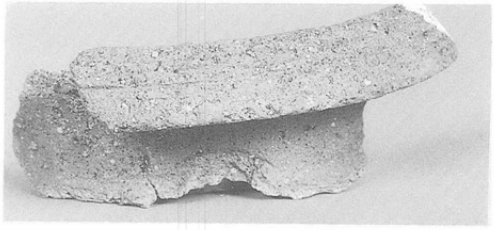
1．　工事完了後遠景（東から）

2．　1号住居址保存状況（北から）

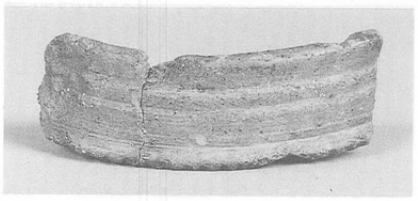
3．　工事完了状況（北から）



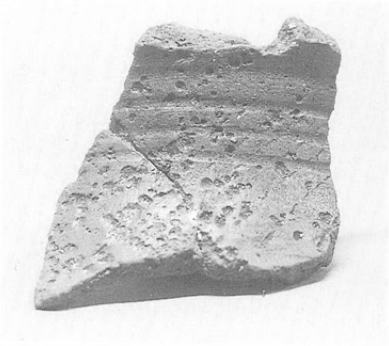
25



37

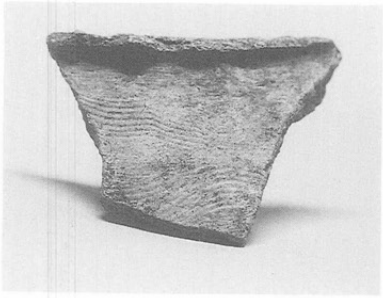


44



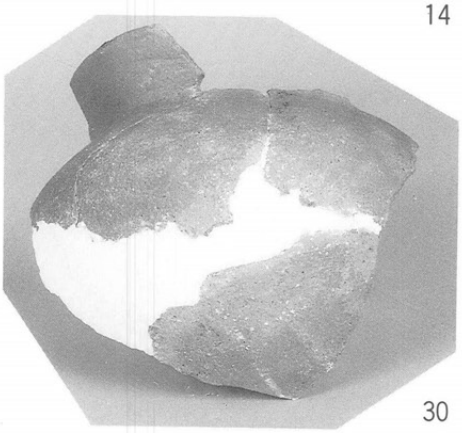
45

1

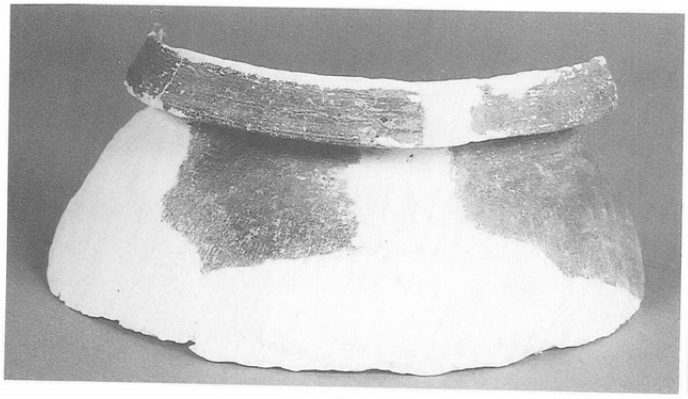


14

36



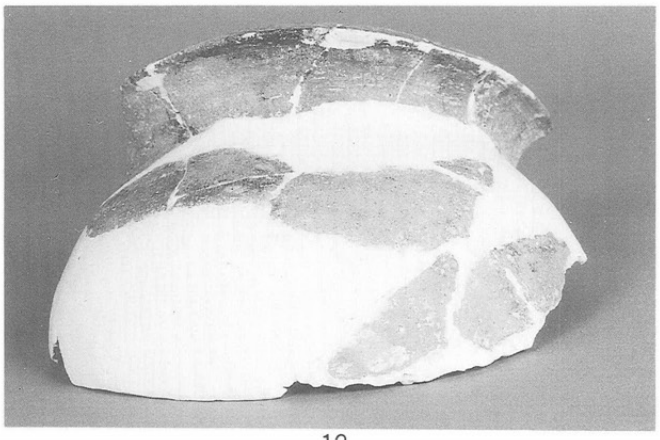
30



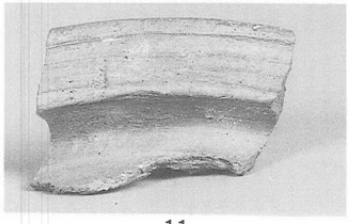
49

29

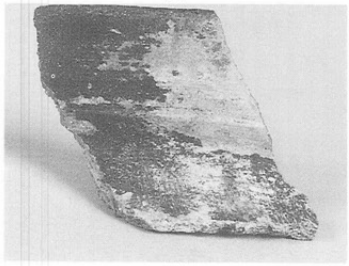
出土遺物（1）（番号は実測図番号）



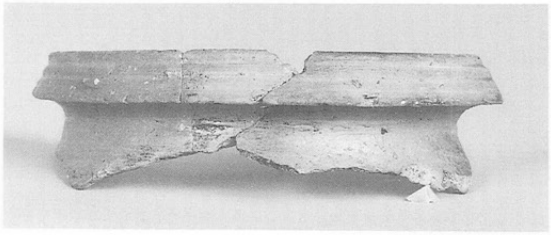
12



11

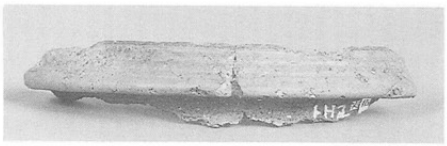


38



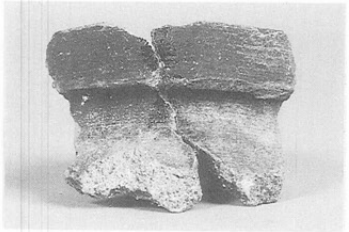
28

9

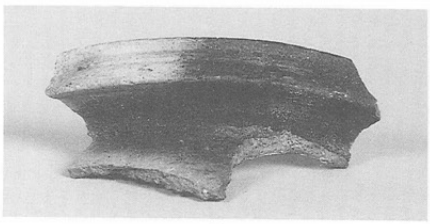


5

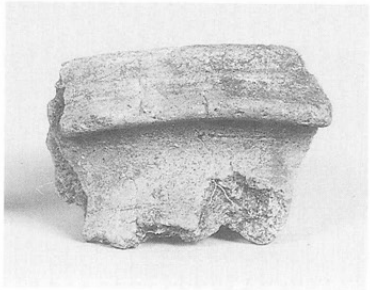
19



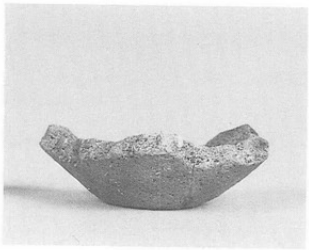
48



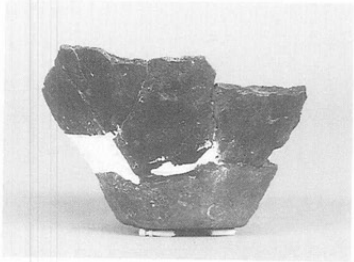
6



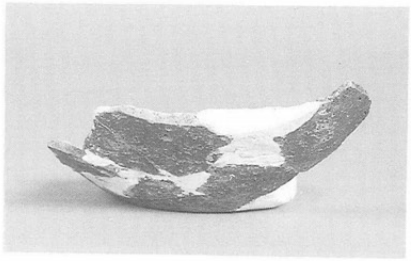
2



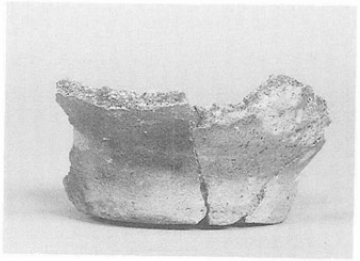
16



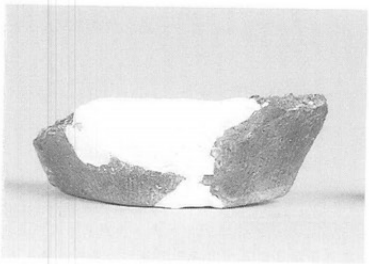
18



21

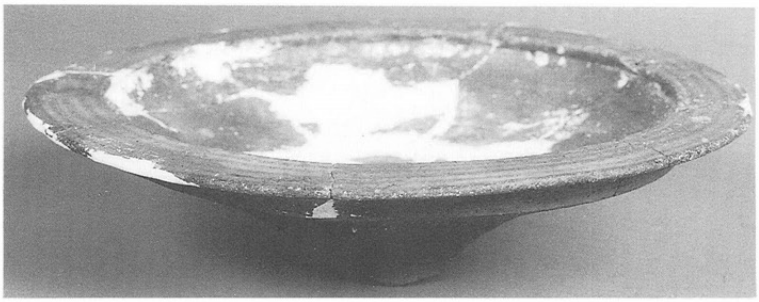


3 号住居址出土

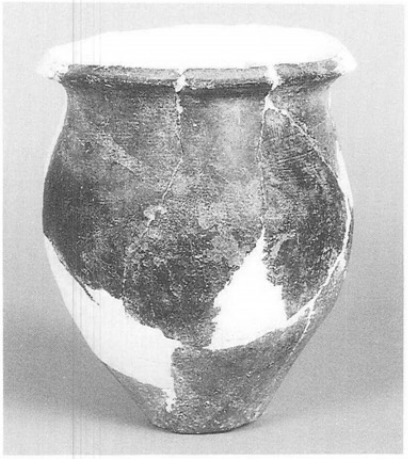


2 号住居址出土

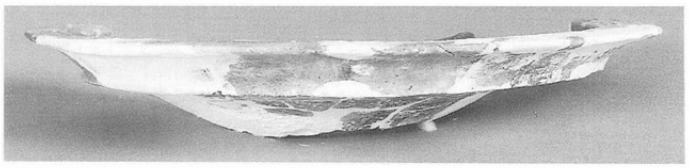
出土遺物（2）



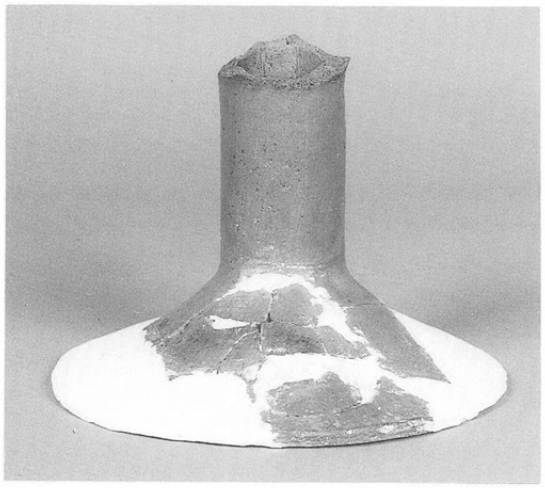
39



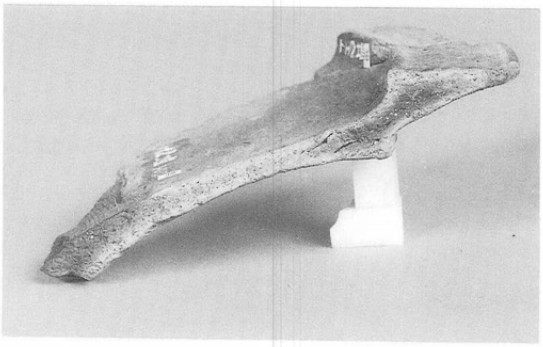
20



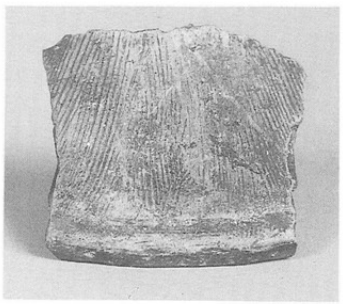
22



34

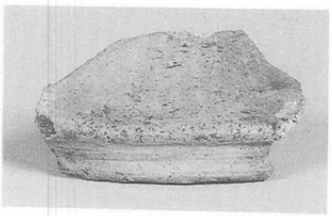


23

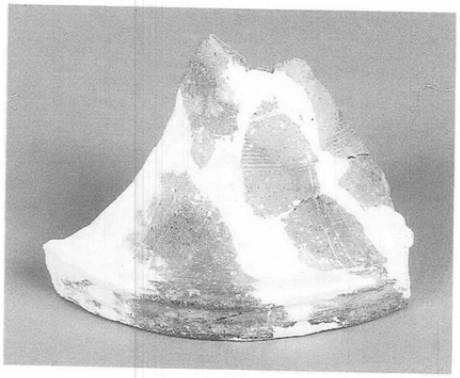


15

31

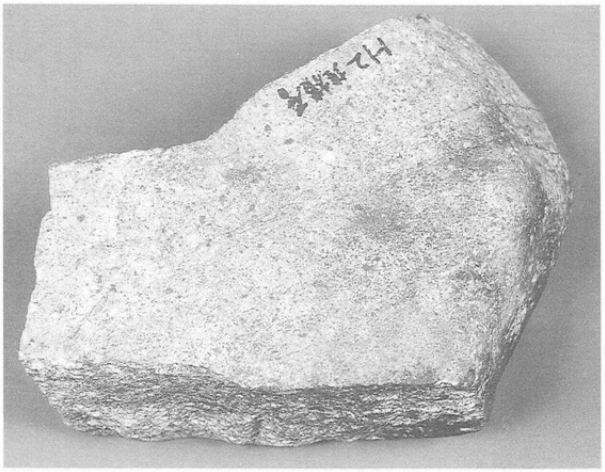


32

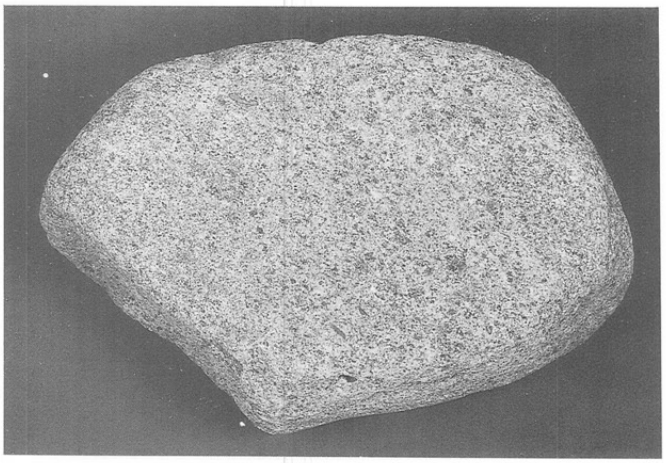


40

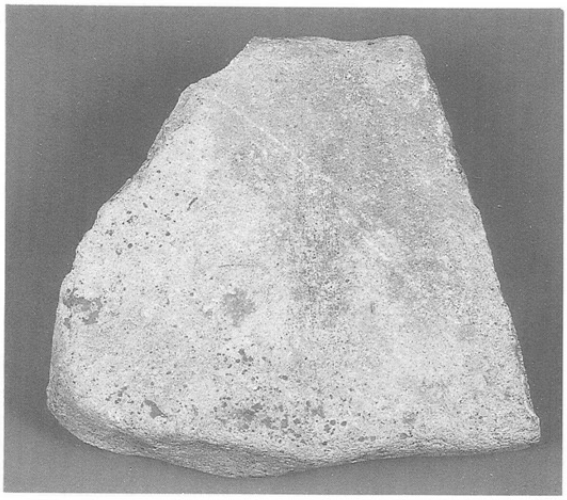
出土遺物（3）



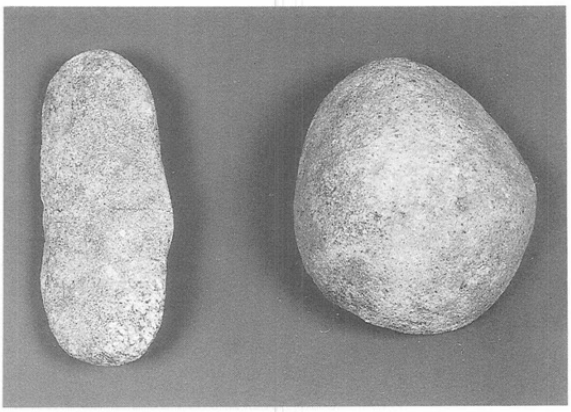
2 号住居址堆積土出土



24

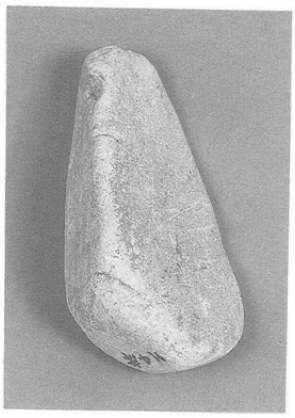


43

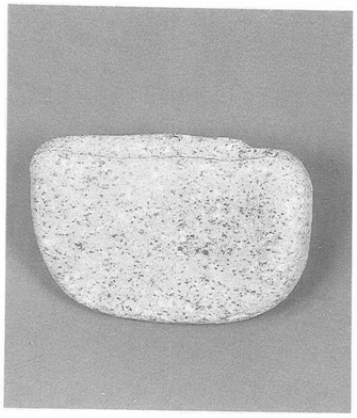


35

3 号住居址土壙出土



41



42

33

出土遺物 (4)

奥津町埋蔵文化財発掘調査報告 1

土 路 江 遺 跡

平成 5 年 3 月31日

発行　奥津町教育委員会

岡山県苫田郡奥津町女原65

印刷　有限会社　美　成

岡山県津山市平福177-2